

幼なじみ☆  
甘〜くエッチに  
過す方法  
公式ファンブック



3人の幼なじみたちとの恥ずかしい遊びのすべてをこの1冊に!

FOR ADULT

幼なじみ☆  
甘〜くエッチに  
過す方法

公式ファンブック、ついに登場!

幼なじみ☆  
甘〜くエッチに  
過す方法  
オファシナルファンブック



The image features three anime-style girls in swimsuits. The girl on the left has long purple hair with a large white bow. The girl in the center has long reddish-brown hair with a yellow bow. The girl on the right has long blonde hair with a black bow. They are all smiling and looking towards the viewer. The background has pink circular patterns.

幼なじみ☆  
甘〜くエッチに  
過す方法  
オファビジュアルファンブック

# 幼なじみ☆ 甘〜くエッチに 過ごす方法 ×ファンブックの

## ものがたり

数年前まで父の仕事の関係で各地を転々としていた後藤荘介(主人公)には、同じ学校に通う、涼風あすかという幼なじみがいた。

ところがある日、荘介が幼少時をともに過ごしたふたりの美少女——大阪の御堂琴音とアメリカのエミリー・ウィンスレット——が転入してきてから、さあ大変。荘介の両親の留守中に、彼の家にホームステイすることになっていた琴音とエミリーは、自分こそが唯一の幼なじみだと主張。ふたりの間でライバル関係が燃え上がり、そこにあすかも加わって大混乱に!!

すったもんだの挙げ句、荘介が昔書いていた絵日記「幼なじみと甘〜くエッチに過ごす方法」を見つけた幼なじみたちは、日記に書かれたエッチなお遊びをどれだけ再現できるかで「真の幼なじみ」を決めることになる。

かくして、3人の幼なじみたちとの過激でエッチな共同生活が、幕を開けるのだった。

## もくじ

● MEMORIAL PHOT	
● パッケージ・販促用イラスト	003
● テレカ用イラスト	004
● 涼宮あすか	
● キャラクター紹介	008
● イベントシーン	010
● 御堂琴音	
● キャラクター紹介	030
● イベントシーン	032
● エミリー・ウィンスレット	
● キャラクター紹介	054
● イベントシーン	056
● ハーレム+α	
● イベントシーン	074
● 関連グッズ紹介	080
● EXTRA MEMORIES	
● サブキャラクター紹介/背景CG集	081
● 線画ラフ集	082
● 声優コメント	094
● 攻略ガイド	095
● 主題歌紹介	095
● ショートノベル	
● あすか編	096
● 琴音編	100
● エミリー編	104
● ハーレム編	108
● メーカーコメント	110



**MEMORIAL PHOTO**

販促用  
イラストや、ショップ  
特典テレカ用の  
書き下ろしイラストを  
大公開!

パッケージ・販促用イラスト









あすかぜ  
涼風あすか

くまのきまぐね  
CV.楠鈴音

いつもの事じゃない。  
気にしない、気にしない♪

**莊** 介のお隣さんの涼風あすかです。莊介の幼なじみとして過ごした時間は、琴音やエミリーよりも長いかな。料理や家事とかは、わりと得意なほうで、いつもだらしない莊介をお世話してあげてるんだよ。友達からは、意地っ張りとか言われるけど……そんなこと、ないよね？

スタイルはそんなに悪くないと思うんだ。エミリーには負けるけどね。胸の形とか、結構キレイでしょ？



表情

自分で言うのもなんだけど、結構、喜怒哀楽が激しいほうかな。感受性が豊かなのよね、きっと。え？ 怒ってばかり？ そ、そんなことは……。



▲通常A



▲通常B



▲あはっ



▲えへっ



▲じへっ



▲ぶいっ



▲じと～

# 服装

女の子っぽいかわいいカンジの服が好きかな？ 色はピンクが好きなんだけど、普段着はちょっと落ち着いた雰囲気にしてるんだ。

## 制服

UNIFORM

白と黒の配色に、胸元の赤いリボンが映えるよね。



## 私服

PLAIN CLOTHES

セーラー服みたいで、結構、気に入ってるんだ。



## パジャマ

PAJAMA

薄ピンクの生地に、イチゴのプリントがかわいいでしょ？



## 水着

SWIMMING SUIT

ちょっぴり、セクシーなこの水着はお気に入り。



## 下着

UNDERWEAR

どちらかというと、下着はかわいい系が多いかな。



▲あれっ？



▲えっ？



▲どうしょ？



▲えっとお



▲てへっ



▲ぐすっ



▲びえ〜ん



▲むっ



▲このお〜



▲むかつ



▲ちょっとお



▲なにソレ？



▲ムキー！



# あすかの絵日記

一番長く一緒だったんだもん  
庄介のことは私が一番知ってるの



びしょびしょの服を早く  
着替えたくて、油断しち  
やったなあ

6月14日(木) 雨

**雨**の中を家まで競争したあと、  
部屋での着替えを庄介が覗  
いていたみたい。ちょっとは  
ずかしいけど、いまさら幼なじみの裸  
なんて見たってどうってことないでしょ  
うに、まったくもう!

少し気持ちよくなったの、  
気付かれてなかったよね?



6月15日(金) 晴

**例**の日記にあったプロレスごっ  
こ。だんだんおもしろくなっ  
てきて、気付いたらこんなエ  
ッチな格好に。おまけに庄介の顔がア  
ソコにぶつかって……もう、わざとや  
ってるんじゃないでしょうね!



6月16日(土) 晴

**開**

館時間までいることになった夏海タワーの展望室で、荘介がしてきたキス。キスの意味をあいつの口から聞いたかったけど、いつか答えてくれるって約束してくれたし、勘弁してあげる♪

2人の関係への不安。こんな偶然がなければ伝える機会なかったのかな

6月17日(日) 晴

**幼**

なじみ勝負に決着がついた翌日、荘介と湾岸公園に行く。話したいことってこの前のこと？ 不安だったけどガチガチになった荘介がおかしくって、園内を引っ張り回してあげた。そして……。

夕暮れの公園であいつから告白を聞いて、私たちは「幼なじみ」から「恋人同士」になれたんだ





6月18日(月) 晴

**バ**カ浅野に奪われた琴音お手製弁当の代わりに、私をひとつあげてふたりきりの昼食。いつもふたつ作ってきてるけど渡せないお弁当が、やっと日の目を見た。荘介の食べっぷりにも満足。

おいしそうに食べてくれるのは嬉しかったけど、お母さんみたいなのはちょっと複雑



莊介のアレ、昔とぜんぜん違うし……こういうのが気持ちいいんだ？



6月19日(火) 晴

**莊** 介があんなことをしてたなんて……でも、ここで引いたら負けを認めたも同然！ 下着で握って擦る？ や、やってやろうじゃないっ、あいつと一番付き合い長い幼なじみは私なんだからっ！



6月19日(火) 晴

**男** の子がイクとこんなのが出るんだ。って、ノックしてるのはエミリー!? 間一髪布団の中に隠れたけど、私がこんな格好にいるのに、いい格好しようとしてるあいつはちょっとむかつくわ。

ちよつとぐらゐ意地悪されるのは当然よね





6月21日(木) 晴

**琴** 音とエミリーがお祭りに行っている間に日記の内容を決行。庄介は裸、私は水着で簡易プールに入って、ホースでアソコに……って、小さい頃のアなたはなんてことしてるんだっ!



だんだん気持ちよくなってきて、もう少して…あぶなかった



莊介のアレを手で擦ってたら、いきなり精液が。もう、水着にかかっちゃったじゃない

6月21日(木) 晴

**大** きくなって苦しそうなアレを見てたら思わず言っちゃった。「私が元に戻してあげるっ」って。そ、そう、あれは雰囲気になっちゃったの! そうなのっ!



6月21日(木) 晴

**射** 精したのに小さくならないアレを今度は口で。だってしょうがないじゃないっ。琴音もやっちゃって言うし! まあ、莊介の気持ち良さそうな顔は嬉しかったけど、これは秘密。つけ上がるから。



やってる最中、エミリーたちが帰ってきてドタバタになってしまったけど、最後までできた。ほんと見つからなくてよかったよ



6月24日(日) 晴

**今** 回やるのはお医者さんごっこ。裸になるのははずかしかったけど、やろうって言い出したのは私だし、しょうがない。荘介には触診させずに、私が自分で触ってことでスタートしたのに……。



胸とか大事なとことか触るように  
言ってきて……ちょっと変な気分  
になってきちゃったじゃないっ!



アソコに指を入れて動かして、最後には……こんな姿見られてどうしよう!

6月24日(日) 晴

**続**

きは下着を脱いですることに。少しでもマシになると思って荘介にも同じ格好で同じことをしてもらったんだけど、おっきくなってるアレを意識して、よけいエッチになった気がするよ、ううっ。



でも、このあと優しく抱きしめて頭をなでてくれて、ぎゅってしてくれたんだ

6月26日(火) 晴

**琴**

音、エミリー公認で荘介とふたりきりで住むことになった。あいつに喜んでほしくて服を脱いでたんだけど、さすがにこの格好は恥ずかすぎっ。裸だったこと忘れてた私が悪いんだけどさあ。





7月30日(火) 晴

今

回するのは、いつ頃からか  
なくなった私の部屋でのお泊  
まり。たぶん、すごいことを  
されちゃうと思うけど、お風呂に入っ  
てる間に覚悟してきた。最初はベットの  
中でふたりでくすぐりあい。

童心に戻ってじゃれあう。少しだけ緊張がほぐれたかな



7月30日(火) 晴

じ

じゃれあいを終えて、下着まで  
脱いで仰向けになると荘介  
の舌がアソコに。それだけ  
でも刺激が強いのに、調子に乗って中  
にまで舌を入れてくるんだもん。思わ  
ず意識が飛ぶほどイっちゃった。



気持ちよすぎて、ほんとどう  
なるのかと思っちゃったよ♡



莊介にもあの感覚を味あわせられなかったのはちよっと悔しいかな



7月30日(火) 晴

イッた時の感覚がすっごく怖かったので、仕返しに莊介にも気持ちよくなってもらうことにしたの。もちろん飛んじゃうほど♥でも、終わったあと、あいつはいきなり優しくなって……ずるい。





莊介にコツを聞きながらやって金魚を紙の上に乗せるまでは行ったんだけど。残念

7月12日(木) 晴

こ数年は友達と行った夏祭りだけど、もちろん今年もひとりきり。出店の金魚すくいを見てたら、莊介が「はい、どうぞ」ってポイを渡してくれた。1匹もすくえなかったけど楽しかったな。



ちょっと怖かったけど、触られたらすぐに気持ちよくなってきた……

7月12日(木) 晴

**莊** 介と一緒にのが嬉しくて、幸せをもっと共有したくて…  
…伝えようとしたらあいつが言ってくれたの。エッチしないかって。もちろん私も言ったよ。「私の初めて、もらってください」って。

7月12日(木) 晴

**い** つまでも私に気を遣う優しい  
莊介を促して、アレが私の中  
に入ってきた。初めは死にそ  
うなほど痛かったけど、だんだん気持  
ちよくなってきて……もしかして、私っ  
てすごくエッチなのかな？

すごく感じて、そのま  
まイっちゃった。気持  
ちよかったよ、莊介♥



さっきより奥にまできて、  
莊介も気持ちよかったかな？



7月14日(土) 晴

**射** 精したあとも硬いままのア  
レ。莊介はまだ満足してい  
ないみたいだから、押し倒し  
て今度は私が上になる。心配してくれ  
るのは嬉しいけど、私のことで我慢な  
んてしないでいいだからね。



もう、どんな夢かは知らないけど、私はどこにも行ったりしないわよ

7月16日(月) 晴

**朝**

怖い夢でも見たのか、荘介がすごいなされていた。そして、起きると子供みたいに抱きついてきて「結婚しよう」って。冗談かもしれないって思ったけど、すごく嬉しかったんだよ。



7月21日(土) 晴

**荘**

介の言葉が嬉しくて、愛おしくて、エッチなことをしてほしくなっちゃってた。あいつも同じ気持ちだったみたいで、それが嬉しくて、恥ずかしいけどエッチな言葉でおねだりしちゃった♥

子宮の入り口まで届くのがすごく気持ちよくなって……私って少し変かな？





深く力いっぱい突いてくれて、腰がとろけちゃうかと思ったよ

7月23日(月) 晴

**荘** 介は満足そうだったけど、恥ずかしながら私はもっとしてほしくて。寝ている荘介のアレを手でしごいて大きくしてから、そのままアレをアソコに……だって、我慢できなかったんだもん!





なりゆきから足でアレを刺激することに。あくまでもなりゆきよ。ちょっと楽しかったけど

8月4日(土) 晴

**莊** 介が生乾きの服を着るなんて言うから、私の服を貸してあげることにした。初めは親切心だったんだけど、だんだん楽しくなってきた、最後はいたずらを……男の子ってこんな気分なのかしら。



8月5日(日) 晴

**些** 細な疑惑(莊介にとっては悪夢を見るほどだったみたい)が晴れたその夜、莊介と一緒にお風呂へ入ることに。あっこの期待もちょっとだけあったけど……私、エッチになっちゃったなあ。



珍しく遠慮してたけどわかってるんだから。もっと気持ちよくしてあげる♥



庄介が射精するまでたくさん突いてもらって……3回もイッちゃった♪

**8月10日(金) 晴**  
**胸** と口でしてる間に、びしょびしょになった私のアソコ。次はこっちに注いでほしくておねだりする。挿入してもらっただけでイッちゃって、潮まで吹いちゃった。だって気持ちよかったんだもん♡



湯船でのエッチはゆっくりなのにすごく気持ちいいの



**8月10日(金) 晴**  
**身** 体に力が入るようになって湯船と一緒にいたら、またアレが大きくなってきて……この節操なし。しょうがないからもう1回してあげることに。お風呂の中でするのは予想外だったけど。





四つん這いになった私のアソコを指と舌で刺激する荘介。これが準備!?

8月12日(日) 晴

**今** 日はあいつの誕生日だから、海水浴に出かけることになった。1日中遊んだあと、私は夕暮れの公園でエッチをおねだり。日記レースみたいのじゃなくて、水着姿でちゃんとしたかったのっ。



気持ちよすぎて意識が飛びかけちゃった

8月12日(日) 晴

**ベ** ンチに座った荘介と向き合うような格好でアレを挿入した。さっきので1回イッてるからか、私の中はすごく敏感で、その上、胸まで同時に。何がなんだかわからなくなるくらい感じちゃった。



8月12日(日) 晴

**私** の中ですぐに元気になった  
アレ。面目なさそうな荘介が  
愛しくって、私はもっとしてい  
いよって言った。次は柵に捕まって後  
から。もっと私に夢中になってくれるよ  
うに、いっぱいして。



いきなりすごく激しくってきつかったけど、  
すごく気持ちよかったよ





ほんとにはずかしかったんだからね。  
あんたにだけなんだから。こんなこと言うの

8月13日(月) 晴

今

日も楽しい1日が終わる。そういえば、今日はエッチなことをしてないって言ってみたら、アソコ触ってじらしながら「エッチな感じでおねだりして」なんて言うんだもん。荘介のスケベ。



互いに勝手にイっちゃったけど、  
最後は荘介と一緒にイケて幸せ♥

8月13日(月) 晴

敏

感なところを指で刺激されてもう我慢できなくなった私は、荘介におねだりして挿入してもらった。それだけでイっちゃった私を心配してくれたけど、私は大丈夫。だからいっぱいして。



## 数年後のある日

**結** 婚して数年経っても、朝弱いのは変わらない旦那様。そんな彼を私はエッチな刺激で起こしてあげるのだ。今日は休日だけど、寝てばかりじゃ駄目よ。楽しい時間はすぐに過ぎちゃうんだから。

私と私の旦那様との幸せな日々が、いつまでもずっと続きますように



## 数年後の結婚記念日

**卒** 業後に結婚した私たちは娘を授かり、今は3人で暮らしている。隣に越してきた浅野一家とは家族ぐるみの付き合いだけど、浅野家の宏康くんとうちの美紗樹も私たちがみたいになるのかな？

子供ができて、**幸** せな時はこれからも続いていくんだ。子供ができて、**幸** せな時はこれからも続いていくんだ。





# みどう ことね 御堂琴音

ほくとみなみ  
CV.北都南

## 荘介くんとやったら ……ええねん

**う**ちは御堂琴音います。荘介くんが大阪におった頃の幼なじみや。家がしきたりに厳しいヤクザ屋さんなもんで、礼儀作法はひと通りこなせるなあ。あと、荘介くんのお嫁さんになった時のために、料理の勉強しとるね。でも、マイペースなところが、たまにキズかもな〜。



体型は少し細いかもしれんなあ？ 胸とかもあんま大きくないけど、武道とかやる時には都合がええねんよ。



### 表情

あんま表情が変わらんとか言われるけど、心の中ではいろいろ思うこともあるんよ？ 好きな人には、微妙な表情の違いをわかってほしいかなあ。



▲通常A



▲通常B



▲あはは〜



▲にっこり



▲ん〜？



▲はいな♪



▲ふえ？

# 服装

どっちかという、服はあんまハデやない方が好みかなあ。あ、もちろん荘介くんがハデハデなのが好きなら、うちもそういうんを着るけどな。



## 私服

PLAIN CLOTHES

ヒラヒラ~としたかわいい感じが気に入っているよ。



## 制服

UNIFORM

頭と胸のリボンさんの組み合わせが、なかなかやね。



## パジャマ

PAJAMA

四つ葉柄が好きやけど……ちょっと子供っぽいかなあ？



## 水着

SWIMMING SUIT

水着はこれしか持ってへんねん。動きやすーて好き。



## 下着

UNDERWEAR

つけ心地がいいんよ。フリルもかわいいしなあ。



▲どうしょ？



▲む〜



▲あれ〜？



▲大変や！



▲ぐすっ



▲むっ



▲あかんわ



▲ぶすーっ



▲ハラキリ！



# 琴音の花嫁修業記

立派なお嫁さんになれるよう  
いろんな花嫁修業がんばらな!



ほんとと言うとな、莊介くんに会うまでは  
うち、不安で仕方なかったんよ? でも  
姿見たら不安なんて吹っ飛んでたわあ!



6月15日(金) 晴

う

ちの身も心も捧げるって約束した運命の人、莊介くんにとっと……やっと会えたかと思うたら我慢なんて考えられなくて。抱き着いてもうた。堪忍な。うち、ほんま嬉しかったんよ。えへへ〜♪

あの味出すの、ほんと難しいんよ。でも、失敗作なんて荘介くんに食わせられんっ！



6月16日(土) 晴

**荘** 介くんが好きって言うた、お母さんの肉じゃが。あの味が出せるよう毎晩特訓してたんやけど、ウトウトしてるうちに見つかってもうて……できるまで内緒にしとこ思ってたのに、一生の不覚や。



ええって言うてるのに、おいしいおいしって食べてくれて……優しい荘介くん、大好きや♥



6月16日(土) 晴

**見** つかってもうた肉じゃがをおかず朝ご飯。荘介くんはおいしいって言うてくれて「ありがとな」って。それだけで、胸の中がすっごくあったかくなって……ほんと、うちは幸せ者やね。





6月17日(日) 晴

**莊** 介くんを起こしに行ったら「チン……出して……くわえて」って。恥ずかしいけど、これも妻の務め。初めてやから、まだまだ未熟かもしれんけど、これからがんばって覚えてくから堪忍な。

うち、莊介くんのお嫁さんやから、エッチなことももっともっとがんばるな



ビー玉、昔よりふたつも多く入ったんよ。うちも成長してるって証拠やね

6月18日(月) 晴

**あ** すかとエミリーがない合間に、日記の内容を再現して…  
…下着を脱いで、大事なところにビー玉を入れてもろーたの。恥ずかしいけど、莊介くんならええんよ。だって、うちの旦那様やもん。



6月22日(金) 晴

次

にやるんは「お医者さんごっこ」。溶けかけの氷で、いろんなところを診察してもろーたの。冷たくてくすぐたくて……でも気持ちよーなつたのは、お見通しやつたみたい。恥ずかしい♥

昔と同じく、  
また相相してもうた！  
荘介くんの前で



荘介くんが気持ちよーなつてくれると、胸がきゅーつてなるんよ♥



6月22日(金) 晴

大

きくなった旦那様のアレをそのままになんかしたら、お嫁さん失格やもん。次は荘介くんのアレを手でしごいていっぱい射精してもろーたの。日記にもあったし、ちゃんとしてきてよかった♪





6月23日(土) 晴

**朝**、確認した日記の内容に従って、学校のトレイですること。旦那様の前で服脱いで包帯で縛ってもらって、カチコチのアレをお口でご奉仕。気持ちよくなってみたいで、よかったー♪



荘介くんが包帯でお股を刺激するから……えへっ、うちも気持ちよくなってもーた♥



見つかったって別にええんよ。  
うちは最後まで旦那様についてくだけやもん♪



6月23日(土) 晴

**日** 記通りに、エッチな言葉で責められてたんやけど、だんだん演技か本気かわからんようになってたんよ。トイレに運動部の人が入ってきたのに、そのまま最後までなんて……もうドキドキやー!





ヌルヌルになっても  
一たところからやらし  
一音がして、すごく  
エッチかったー♪

6月26日(火) 晴

**日** 記にあったうちのアソコと庄  
介くんのアレをくっつけて擦  
るの……「スマタ」という  
ん？ これに挑戦や。うちが上になっ  
てやったんやけど、昔やった時よりも  
スゴくて……気持ちよすぎっ！

チューしただけなのに、  
うち我慢できなくなって  
もうて……いじわる～、  
笑わんといてー!



7月27日(金) 晴

莊

介くんに誘われて、夕暮れ時  
の湾岸公園をお散歩。そこ  
で、莊介くんは「好きです」  
って言うてくれて、私も昔よりもっと好  
きになりましたって言うて……いっば  
いっばいキスしたよ♥



ふえ～ん、こんなじゃあまた、お父様に怒られる  
わあ。おっちゃんも、ごめんなー。

7月28日(土) 晴

海

水浴からの帰り道、ガラの悪  
いおっちゃんがうちにから  
んできたんやけど……気が  
付いたら目の前で目え回してた。莊介  
くんが護ってくれたん? えっ、もしか  
してやってしもたのはうち!?





うちの処女、もろうてくられてありがと。  
ずっと一緒にいてな、旦那様♥



7月29日(日) 晴

**夜、** あすかが帰ってふたりきりになって……やっとひとつになれたんよ。初めての共同作業は、他のエッチなことよりずっと気持ちええの。これで、うちはほんとに旦那様のものになったんやね♪

うちの胸、エミリーたちみたいに大きなくてごめんな

7月30日(月) 晴

**み** んなで海水浴場に来たんやけど、いつの間にかあすかたちは先に帰ってもうて、ふたりきりに。今日は一度もエッチなことせえへんかったからへんな気分になってきて、人気のないところで……。



気持ちよすぎで、お腹の中、全部持ってかれるかと思うたわ☆



7月30日(月) 晴

**胸** で射精してもらって、その匂い嗅いだら、うち、我慢できんくなってもうた。おねだりしたら、荘介くんのもすぐおっきくなって、水着を着たままのうちのアソコにそのまま挿入してくれたん。



7月30日(月) 晴

**莊** 介くんのアレは、一度出しても満足せえへんかったみたい。あはっ、ほんましゃーない人やねー。うちもイッたばかりで気持ちええの収まってへんけど、何回でも満足するまで射精してええよ♥



アソコを突きながら、後ろからぎゅってされるのが大好きい……  
身体、フワフワするう♪



8月3日(金) 晴

**庄** 介くんと一緒に映画館でデート。庄介くんったら、人少ないんをいいことにチューしてきて……お返しに、お口でしてあげることにしたんよ。おかげで、映画はちっとも観れなかったけどな。

旦那様の恥ずかしそな顔とか、気持ちよさそな顔、うち大好きっ♡



8月5日(日) 晴

**う** ちを賭けた麻雀勝負の前の晩。庄介くんと、気持ちを確かめあった。もし負けたら、死んでもええ。それがうちの気持ち。ありがとう、庄介くん。こんな重い気持ち、受け止めてくれて。



何回もしてるのに……なんで今日は恥ずかしいんよ





お月さんが見ている下で……。旦那様がプロポーズしてくれて、うち幸せやわぁ♥



8月5日(日) 晴

1 回イッってもビキビキの旦那様のために、今度はうちが上になって、襲ってあげたんよ♪ いっしょにイケてホンマよかった♥ そのうえ、すぐ結婚しよう言われて……。うち、幸せモンや♪





8月12日(日) 晴

莊

介くんと一緒に、大阪帰ったんよ。お土産ゆうて、銀二さんが持たせてくれたエッチな本見てたら、また遊びがしたくなって…。屋外プレイのために、ローターを入れてもらたんや♪



は、恥ずかしーいけど、これも立派な夫婦になるための試練なんや！ がんばらんと！

8月12日(日) 晴



ローター入れたまま、エプロン姿で莊介くんとお出かけ♪ 花嫁修業は嬉しいけど、ノーパンのうえにお汁も流れてもうて……。途中でローターも落ちてまうし、大変やったわあ。



銀二さんのお土産のローター、しっかり入れ直さんと！ ……なんや、エッチな視線が気になるなあ





8月12日(日) 晴

夏

海タワーの観覧車の中で、裸エプロン姿で、荘介くんに包帯で縛ってもらったんやけど……。アソコに人参やソーセージ入れられて、言葉責めや撮影されたら、いつも以上に興奮してしもたん♡



こんな格好、恥ずかしいはずなのに……旦那様相手だと、なんやすごく気持ちいいわ♪



エッチなうちって変態かなあ？ でもふたりとも気持ちいいならええよね♪



8月12日(日) 晴

う

ちのこと愛撫してくれたた荘介くんやけど、我慢できなくなったみたい。うちも、荘介くんの熱いのが、ほしくてたまらんかったのん♥ 激しくって、すごく感じてしもたん♪



ジェルのヌルヌルがよくって……  
旦那様、もっとうちをいじめて♪

8月14日(火) 晴

今

日の花嫁修業は、水着姿でジェルプレイだったんよ♪ 荘介くんに、ジェルまみれにされて、結び目のある包帯や手でいじめられたら、エッチな言葉が自然と溢れだしてしもの。



旦那様、エッチなうちを  
使って、もっともっともっ  
と気持ちよくなつて♡

8月14日(火) 晴

花 嫁役に入り込みすぎたうち  
やったけど、荘介くんにして  
ほしいと思ったのは本心や  
ったの。いつも以上に奥深くまで突か  
れて、すぐにイっちゃったん♪ 熱い精  
液も最高やったね♡

8月14日(火) 晴

お

風呂場での花嫁修業も終わって、最後は幼なじみの恋人としてのエッチをすることになったん。後ろから買かれながら、耳を責められたら、すぐにイッてしまうて残念やった。



莊介くんにいじめられるの大好きよ♥  
気持ちよすぎて死ぬかと思ったんよ♪

9月6日(木) 晴

2 学期が始まって1週間。プールの授業で水着着たら、花嫁修業のこと思い出して、莊介くん会いたったの。何回もキスしてくれたから、大満足やった♥

体が火照ってしょうがないねん。学校でも、かわいがってほしいなあ♪



今日は、海外赴任から戻った夫の求めに応じる妻の役。次のエッチはどうしよ？



### 数年後のある日

**う** ちが、荘介くんのホンマの花嫁になってから数年。今は、旦那様の実家でラブラブな日々を送ってるんよ♪ 銀二さんのプレゼントしてくれたエッチな本が、新生活のスパイスやねん♥

## 二学期の登校日

**麻** 雀勝負に圧勝した旦那様。  
うち、信じてたよ。その後、  
うちと結婚するって、お父様  
の前で言うてくれたの、ホンマ嬉しか  
った♥ 卒業前に結婚するゆうたら、  
みんなどんな顔するかなあ♪



もううちら夫婦なんやから、ベタベタしてもいい  
よね? 幸せすぎて、うち恐いくらいや♥

## 数年後のある日

**結** 婚式は、みんながお祝いして  
くれてよかったなあ。それか  
ら数年後、今日は娘の未  
卯の初めての七五三。優しい旦那様と、  
かわいい娘に囲まれて、うち、今最高  
に幸せなんよ♥



愛する家族といっしょに、  
せに暮らしていききたいなあ♪  
幸



# エミリー・ウインスレット

CV. 安玖深音 あぐみ ひと

## 深い仲だったんだもん、 忘れるはずないよネ

**わ** たしはエミリー・ウインスレット。荘介がアメリカにいた頃の幼なじみなんだ♪ とにかく元気なのが取り得！ 考えるよりも、身体のほうが先に動いちやうことも多いかな。思ったことは、ハッキリ言っちゃうタイプだね。がんばって勉強したから、日本語はペラペラだよ♪

もちろん、スタイルには自信あり♪ アメリカで生まれたスペシャルなボディに、荘介もメロメロだね♥



### 表情

思ったことが、すぐに顔に出るってよく言われるかも。でもでも、表情がコロコロ変わる女の子のほうが魅力的だよねっ！ 荘介もそう思うでしょ？



▲通常A



▲通常B



▲アハッ♪



▲フフッ



▲んふいっ♪



▲ん〜？



▲どお？

# 服装

自慢のボディに合ったセクシーな服が好きかな。下品なカンジのはNGだけど。プライベートの時は、ラフにまとめることもあるよ。

## 制服

### UNIFORM

学校の制服は好きだよ。アメリカじゃ着れないしね。



## 私服

### PLAIN CLOTHES

動きやすい服が好き♪ 胸のラインもよく見えるでしょ？



## 下着

### UNDERWEAR

下着はセクシーなヤツが多いよ。色は黒がお気に入り♥



## 水着

### SWIMMING SUIT

水着はやっぱり、セクシーなビキニで決まり♥



## 体操着

### SPORTS UNIFORM

あはっ♪ 男の子って、こういう格好も好きなんだよね？



## パジャマ

### PAJAMA

寝る時は、ちょっぴりラフな感じになるんだ。



▲あれ？



▲んっ？



▲む〜っ……



▲うに〜!



▲う〜ん……



▲あ〜…



▲ぶ〜っ



▲そんな……



▲うわ〜ん!



▲ぐすん



▲むかつ!



▲このお!



# Emily's Diary

今度はダーリンの生まれた国で、  
前よりもっと深い仲になろうね♥



日本に来たばかりで、ダーリンとの大  
切な思い出がまたひとつできちゃった



6月18日(月) 晴

**お** なかペコペコのエミリーに、  
ダーリンがおごってくれたコ  
ロッケパンと牛乳。最初はち  
よっとチープななって思ったけど、食べ  
たらすごくおいしいの。幸せを感じた  
惣菜パン初体験だったんだ。



6月22日(金) 晴

**ダ**ーリンとふたりきりで、夏海タワーの展望台から見た夕暮れの街の景色は、わたしをちょっぴりセンチメンタルにしたりもするけど、でもやっぱり日本に来てよかったなって、そう思ったの。

この街の数少ないデートスポットでダーリンとふたりっきり♥



デザートなんて、砂糖とか生クリームとか適当に混ぜればできる……よね

6月25日(月) 曇

**昔**ダーリンと食べた思い出のデザートをもた食べたくなくて、ダーリンとふたりで作ることにしたの。正直、料理の腕には自信のないエミリーだけど……チャレンジスピリットが大切だよな!





わたしがさわってあげると、  
どんどん大きくなるの。なん  
だかちよっと嬉しいな♥



6月29日(金) 晴

**ダ**ーリンの入ってるお風呂にお  
ジャマしちゃった。アメリカ  
ではよくふたりで一緒に入っ  
てたんだよね。それにしてもダーリン  
のアソコ、昔とくらべて、びっくりする  
ほど大きくなってたなあ……☆



7月10日(日) 晴

日本で大流行してたっていう「デンキアンマ」をまたやってみたの。おたがいに足で相手の股間を責めるゲームね。日本の流行はよくわからないけど、今やってもなかなかエキサイティングだったわ。

ダーリンに教えてもらった日本の流行には、他にも「カンチヨー」があったわね



わたしも電気あんましてもらったけど、ダーリンの足、気持ちよかったな



7月10日(日) 晴

な

なかなか我慢強いダーリンをギブアップさせるためにエミリーが新たに考案したのが、両足バージョンの電気あんま。そしたらダーリンてば、ミサイルみたいにお汁をたくさん飛ばしたんだよ。






7月4日(水) 曇

**日** 記にあったボディペインティングをやったあと、ダーリンの体を洗ってあげて、ついでに(?)ダーリンのアレを啜ってあげちゃった。実は、えっちなホームページを見て勉強してみたんだ☆

ダーリンに「気持ちいい」って  
言ってもらえるのが、とっても  
とっても嬉しいんだよね





「莊介先生」の診察がすごく気持ちよくて、わたし、ビクビクってなっちゃったの♡

7月8日(日) 晴

今

日は、日記にあった「お医者さんごっこ」を再現してみたの。昔はおたがいの体のいろんなところの長さを測ったりしてみたい。鉛筆を使って穴の深さを調べたのも……再現してみたよ。えへへ。



アソコを拭いてる姿がいいなんて、ダーリンってば、変態さんなんだから♡



7月8日(日) 晴

頭

が真っ白になって、体がビクビクってなった時に、わたしの女の子の穴から、お汁がたくさん出てきちゃったの。これって、いつものダーリンのアレと同じなのかな。ちょっと恥ずかしいね。



7月8日(日) 晴

**お** 医者さんごっこは、「先に笑ったら負け」なんだって。わたしは最後まで耐えたから、今度はこっちがトライ。ダーリンのいろんなところを舐めたりしたけど、結局笑わせられなかったんだ。

笑うのはガマンできたダーリンだったけど、別のコトはガマンできなかったみたい♥



7月13日(金) 曇

今

日の日記の遊びは「レロレロ遊び」。舌と舌をくっつけて、ぺろぺろ舐め合う遊び……  
っていうか、これフレンチキスだよなー。なにを隠そう、あれがエミリーのファーストキスだったんだ♥



ダーリンもあれがファーストキスなんだって。これでセカンドキスもエミリーのものだよーね!



この時のキスは、挨拶でも遊びでもない、本当のキス。エミリーの気持ち、ちゃんと伝わったかな

7月17日(火) 晴

今

日、変な二人組に追いかけられたの。すっごく怖かったけど、ダーリンが助けてくれたんだ。わたしその時、本当にダーリンのことが好きなんだなって思えて、気がつくとキスしてたんだ。



最初は結構痛かったけど、  
すぐ気持ちよくなったの。  
ダーリンの愛のおかげね♥

7月22日(日) 晴

この日はわたしにとって、一生の思い出になった。観覧車でダーリンに好きだって言われて、そして、痛ってすぐに甘〜いひとときを過ごしたの。ふたりとも初めてで、ドキドキしっ放しだったんだ☆



神サマ、ダーリンと出会わせてく  
れて、本当にありがとう♡

7月22日(日) 晴

**ダ**ーリンとの「初めて」は、自分でもびっくりするほど激しくなったの。ダーリンが動きたびお腹に響いて、ぜんぜんガマンできないくらい気持ちよくて……。思い出すと恥ずかしいなあ。



7月30日(月) 晴

**不**安と寂しさでいっぱいになった夜、わたしはダーリンの部屋に行ったの。ちょっとサービスのつもりでおっぱいを使ってみただけど、ダーリンすごく興奮しちゃって、あっという間に……♡



ダーリンのアソコ、ヒクヒク暴れちゃって、なかなか押さえ込めなかったんだ♪

いろいろあったせいで、こういうのご無沙汰だったダーリン。結構溜まっていたみたい☆

7月30日(月) 晴

**ダ**ーリンのを入れたまま、ギュッて抱きしめてもらった。心臓の鼓動まで伝わってきて、ダーリンが確かにここにいるんだって実感できた。絶対ダーリンと離れたくないって、わたし思ったんだ。

こうして抱き合うことで、ダーリンのこと、前よりずっとよくわかるようになったよ♥

7月30日(月) 晴

**今**日はちょっと大胆に、わたしのほうから行っちゃった。ダーリンのオチ○チン、大きいから最初キツイんだけど、それが逆に気持ちいいんだよね。エミリーの中がダーリンでいっぱいになるの。





ダーリンの指で触られると、なんだか電気が走ったみたいに感じるの



8月5日(日) 晴

**ダ**ーリンはエミリーの胸が好きなんだって。だから好きだけ触らせてあげた。ダーリンの触り方、すごくえっちな。でもわたし、ダーリンにならどこを触られても、とっても気持ちいいんだ♡



8月5日(日) 晴

**オ**チ○チン入ったまま乳首を弄られると、もうなんだか気持ちよすぎて、自然に腰が動いちゃう。ダーリンったら、他にもいろんなトコ触ってくるから、わたしもすぐに限界がきちゃう♡

ダーリンとのえっちは、全然疲れない。何度でもできちゃうから不思議





8月5日(日) 晴

**わ** たしはちょっと抵抗あったんだけど、ダーリンがしたいって言うから、その……お尻の穴に入れさせてあげたの。なんだか変な感じだったけど、ダーリンはすごく気持ちよかったみたい。



アソコをいじる刺激と混ぜて、お尻のほ  
うもなんだか気持ちよかったかも……？



まるでマグノリアの木が、エミリーの想いをダーリンに伝えてくれたみたいだった……



8月21日(火) 晴

**眠**れない夜。ダーリンとの思い出の木、マグノリアを眺めていたら、そこにダーリンがやってきたの。そしてわたしを抱きしめて、離れたくないって言ってくれたんだ。涙が出るほど嬉しかった♡

8月21日(火) 晴

**I** ミリーとダーリンは、なんていうか、勢い余って(?), その場で始めちゃったんだ。家の外で、しかも立ったままなんて、ちょっと変態ちっくだけど、この時はそれくらい嬉しかったんだよね。



立っていると体重がかかって、いつもよりさらに深く入ってきちゃうの♥





思い出のマグノリアの前で、エミリーたちの恋の炎は激しくバーニングしたの♡



8月21日(火) 晴

**ふ** たりとも盛り上がったから、もちろん一度じゃ終わらなかった。今度は後ろからダーリンが入ってきて……。かなり声も出たから、近所の人に聞こえてたかも。今になって恥ずかしいよお。



ダーリンが言うには、濡れた服の感じが気持ちいいんだって♪

8月27日(月) 晴  
**お** 風呂でシャワーを浴びてるダーリンのところに、体操服で押しかけちゃった。日本の男の子は、この体操服が大好きなんだって。ダーリンも好きみたいだし。だから着たままでサービスしたの☆

この体勢ですると、お腹が中から持ち上げられる感じがするの



8月27日(月) 晴

シ ャワーを浴びながら、少し恥ずかしい格好でダーリンを受け入れる。最近のわたし、ダーリンに触られるだけで嬉しくて、興奮して、なんだかすごくえっちな気持ちになっちゃうんだ♡



待ってって言ったのに、ダーリンたらど  
んどん激しく動くんだもん♡

8月27日(月) 晴

今 度はエミリーが上になってみた。今までこの格好でしたことなかったんだよね。ダーリンとぴったり密着してる感じがすごく嬉しい。なんだか今まで以上に感じちゃってたかもしれない。





9月10日(土) 晴

**ダ**ーリンにとっての真の幼なじみの座を見事勝ち取ったわたしは、いまやみんなも認めるスタディな関係。アメリカで築いたふたりの「深い仲」は、どれだけ時間が流れても変わらなかったってこと!

行ってきますの「ちゅー」は欠かせないよね。まあ、ふたり一緒に登校だけど



コスチューム、ちょっと汚れちゃったけど、拭いておけば大丈夫だよな?

**卒業後のある日**  
**学** 校を卒業したエミリーは、今もダーリンと一緒にひとつ屋根の下、ラブラブな毎日を送っている。今日はアルバイトのコスチュームを着たまま、マグノリアの木の前で愛を確かめ合っちゃった♪



### 卒業後のある日

**ダ**ーリンはもっとあとでいって言ってたけど、ダーリンのお父様の勧めで、わたしたちはすぐに結婚することになったの。もちろん、エミリーは大賛成。でも、結婚式前もえっちはしようね♥

今日からダーリンのこと「あなた♥」って、呼んじゃおうかな。アハ♪



### 数年後のある日

**今**、わたしのお腹の中にはダーリンのベイビーがいるんだ。だから、最近はずっとセックスできなかつたんだけど、ようやく安定期に入ったから、それも解禁！ おまたせ、あ・な・た♥

わたしはあんまり動けないから、あなた、がんばって動いてね♥



# みんなの絵日記

遊びもエッチもみんな一緒！  
こんなのもアリだよな？



この頃は、みんなライバル心むき出しやった  
んよ。今思うと、なんや恥ずかしいなあ

6月23日(土) 晴

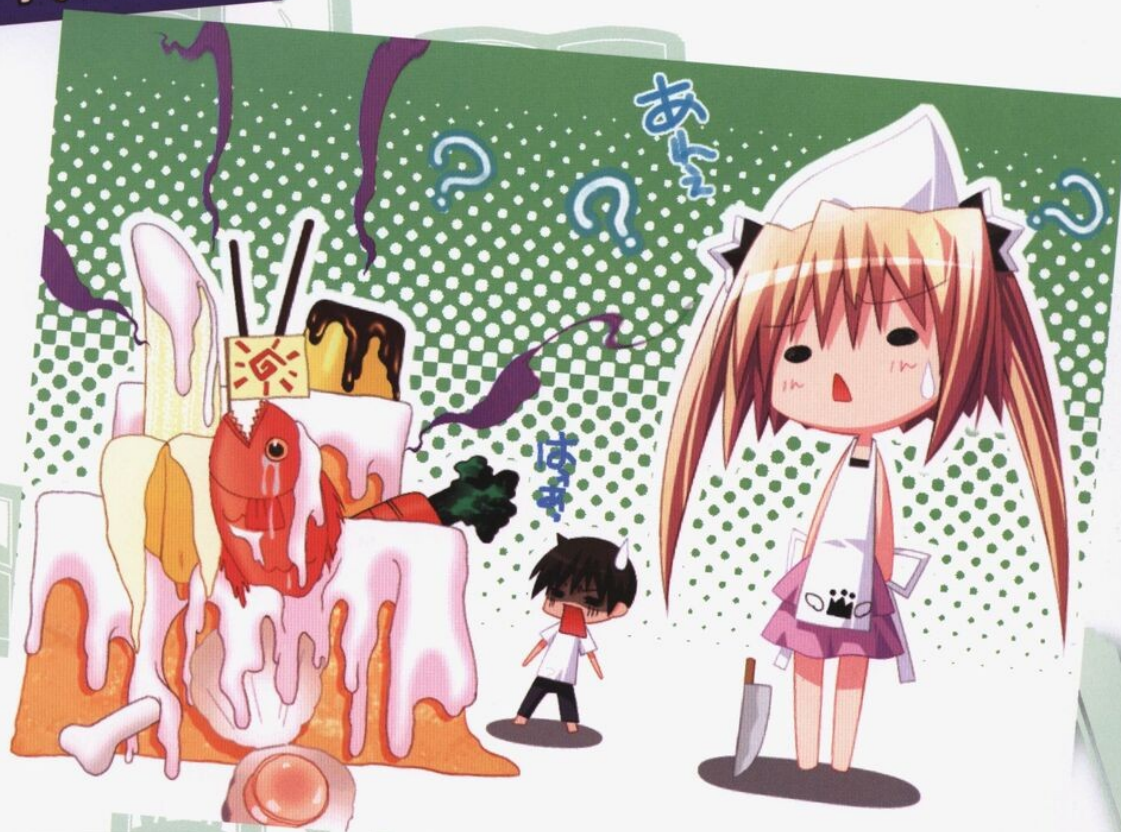
**荘** 介くんの提案で、うちの親  
睦会を開いたんやよ。みん  
なでご飯を作って、一緒に庭  
で食べて……始めはええ感じやったの  
に、結局うちもムキになってもうた…  
…反省や。 【琴音】



6月25日(月) 晴

**み** んなで心靈番組を鑑賞した  
んだけど……琴音もエミリ  
ーも怖い話が苦手で、ひと  
りで部屋に戻れなくなっちゃった。い  
や、私もんだけどさ……変な意地を  
張るんじゃないかなあ。【あすか】

この時の荘介は頼もしかったな……やっぱり、  
アイツも男の子なんだよね☆



6月27日(水) 晴

**子** 供の頃、ダーリンとふたりで  
作ったデザートを作ってみた  
んだけど……こんなのだっ  
たけ? おっかしいなあ。あ、ちなみ  
にこのあとで作ったヤツはちゃんと成  
功したよ♪ 【エミリー】

記憶を頼りに適当に作ったら、スゴイことになっちゃった……失敗失敗♥



教室が暑過ぎるから、みんなで服を脱いじゃった。私は下着女医って設定だよ♥

7月21日(土) 晴

み

んながダーリンの一番になった記念に、無人の教室で、お医者さんごっこをして遊んだよ♥ ダーリン、みんなでお医者さんごっこするのを楽しみにしてたんだよね〜♪

【エミリー】



7月21日(土) 晴

日

那樣の問診をしてたら、おち●ちんが腫れ上がってもう大変なことに。これはもう、緊急オベしかないわ。うちらが気持ちよくしたげれば、おち●ちんも小さくなるよな♥

【琴音】



みんなで、旦那様の股間を治療中や。今のうちらは、女医さんやし♥

今度は私が患者さん。ダーリンのことを想うと、アソコがムズムズしちゃんだけど？

7月21日(土) 晴

**今** 度はダーリンが先生の役♪  
くちゃくちゃに濡れたアソコ  
を診察してもらったんだ♥  
ダーリンに触診してもらったら、すっごく  
気持ちよくなっちゃって、何回もイッ  
ちゃった♪ [エミリー]



みんなが処女なのをぶっちゃけたのもこの時。荘介も童貞なのを白状したよ♪

7月21日(土) 晴

**次** は私と琴音が診察される番。  
まあ、仲間外れもイヤだしね。  
途中でエミリーも混ぜて、  
私の胸を舐め始めたの。女の子にされるのは抵抗あったけど……気持ちよかったかな♥ [あすか]





7月21日(土) 晴

**琴** 音とエミリーの前だけど、  
庄介と初めてのエッチをしちゃ  
った。でも、私たちはみんな  
が庄介の一番だから、ロストバージン  
も一緒。このあと、ふたりも庄介とエッ  
チしたんだよ。 【あすか】

庄介とホントのエッチをしちゃった。自分の  
気持ちを抑えられなくなっちゃったんだ。



ダーリンと、初めてのエッチ♥  
琴音の愛撫も気持ちよかったヨ～～♪

7月21日(土) 晴

**初** めてのエッチで、ガチガチな私の身体を、琴音がほくしてくれたんだ♥ 私の国の言葉で、ダーリンと内緒の話もしたヨ。あすかと琴音もわかってるっぽかったけどね。  
【エミリー】



うちの夢は、床上手のお嫁さんになること♥  
初めてやけど、うまくできたかなあ？

7月21日(土) 晴

**う** ちのアソコちっちゃいから、旦那様のが入りづらくて苦労したわ。エミリーもうちを気持ちよくさせてくれたなあ♪ 初めてやったけど、旦那様のためにがんばったんよ。  
【琴音】

# 関連グッズ紹介

## おっぱいマニアのためのアイテムをピックアップ!

メディアオ!とのコラボ企画で製作されたのが、エミリーとあすかのおっぱいをモチーフにしたマウスパッドだ。おっぱいの感触を堪能できる、この夢のような一品。すでに完

売していたり予約受付が終了しているため、入手が困難なのが残念なところだ。「今からでもほしい!」というファンは、下記のプレゼントにぜひ応募してみよう。

### エミリーちゃんの萌え萌えハアハアおっぱいマウスパッド



●製作・発売:メディアオ! ●発売日:2007年4月27日  
●販売価格:4980円(税込) ※通販予定数量完売

### あすかちゃんの萌え萌えハアハアおっぱいマウスパッド



●製作・発売:メディアオ! ●発売日:2007年6月29日  
●販売価格:4980円(税込) ※予約受付終了

### あすかちゃんの描き下ろしテレカイラストも大公開!

あすかの描き下ろしイラストは、ゲーム本編では登場しなかった裸エプロンバージョンと、マウスパッドに使われた下着姿バージョンの2種類が存在する。ファンは要チェックだ。



描き下ろし完全版テレカ



描き下ろし差分エプロンテレカ

### マウスパッドプレゼント!!

メディアオ!から皆様へ、うれしい贈り物!

- ①エミリーちゃんの萌え萌えハアハアおっぱいマウスパッド 1名様
- ②あすかちゃんの萌え萌えハアハアおっぱいマウスパッド 3名様

応募方法:必ず本書に付属しているアンケートハガキを使って応募してください。メ切は2007年11月末日(当日消印有効)です。当選の発表は、発送をもって代えさせていただきます。

# SUBCHARACTERS

## サブキャラクター紹介

ストーリーを引き立たせる  
サブキャラたちが大集合!



### 浅野康晴

荘介の腐れ縁の  
親友(?)

荘介の悪友。外見からはもてるように見えるものの、性格が軽いため、口を開くと三枚目の本性が表れる。女の子好きで荘介の幼なじみ3人にも諦めずアプローチをするが、軽くあしらわれることに。軽口をたたき、あすかや琴音にやられてしまうこともしばしば。

### 奈緒

あすかの姉御肌の親友

あすかと荘介のことを夫婦だとからかったり、彼女の元気のない様子に気付いたりする、優しく活発な女の子。

### 主人公の父

放浪癖のある適当親父

自由奔放に各地を転々とし、荘介の特殊な境遇を作り出した張本人。実はなんでも知っている……!?



### 担任の先生

荘介のクラスの独裁者

生徒の成績は、この人のさじ加減で決まると言っても過言ではない絶対権力者。怒らせると非常に怖い。

### 琴音の父

御堂組の組長さん

ヤのつく職業を仕切る組長。普段は強面で豪快な親父さんだが、娘と奥さんには頭が上がらない。

### 銀二/サブ

花嫁修業の元となった組員

花嫁修業は、間接的に銀二が教えたようなもの。琴音や荘介のことを心配したり、優しいところも見える。銀二のパシリをしているサブは、ドジをよく殴られるが、どこか憎めない。

### 蛇山鬼丸

琴音に一目ぼれした、町のチンピラ

琴音にからんで投げられ、その強さに惹かれたことがきっかけとなり、彼女を賭けて荘介と麻雀で対決することになる。

# BACKGROUND CG

## 背景CG集

夏海町を中心とした、さまざまな風景を思い返そう

荘介の部屋



リビング



ベランダ



キッチン



お風呂



洗面所



二階廊下



玄関



庭



琴音の部屋



エミリーの部屋



あすかの部屋



リビング(涼宮家)



キッチン(涼宮家)



お風呂(涼宮家)



御堂家正門



御堂家部屋



教室



学校廊下



夏海タワー



タワー展望室



夏海ロード



夏海駅



海岸通り



湾岸公園



海岸



海



アメリカの家



EXTRA MEMORIES

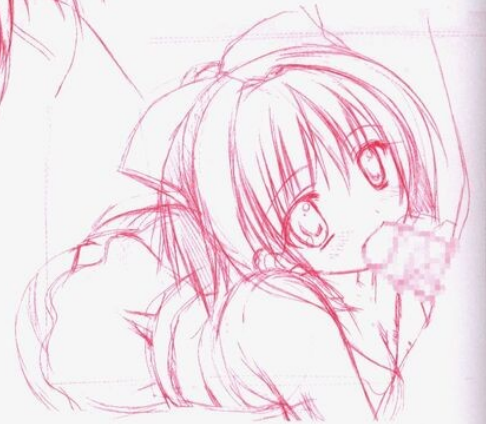
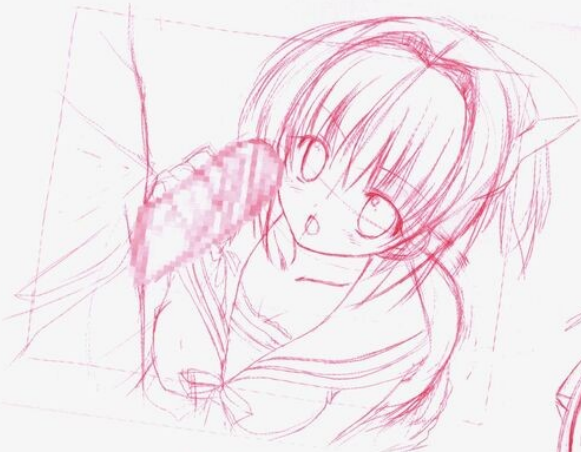
# LINE ART ROUGH

## 線画ラフ集

ゲーム画面とは違った魅力の、ラフ&線画が大集合!

### 涼風あすか

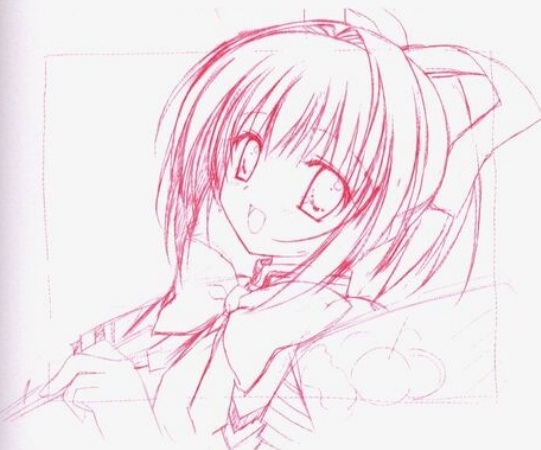
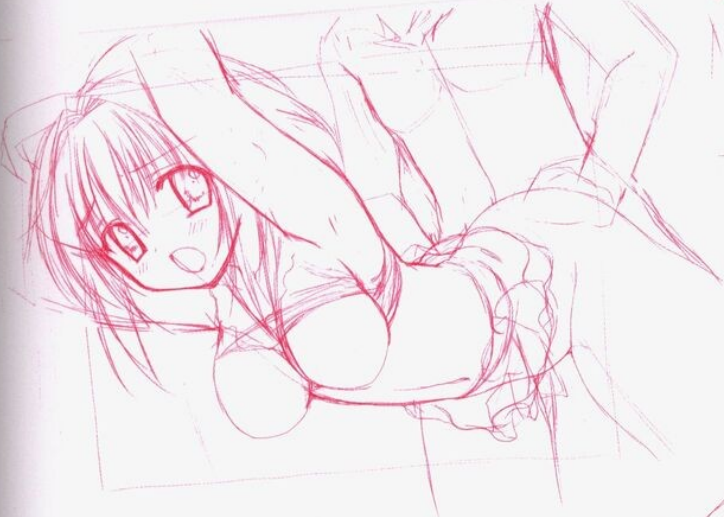
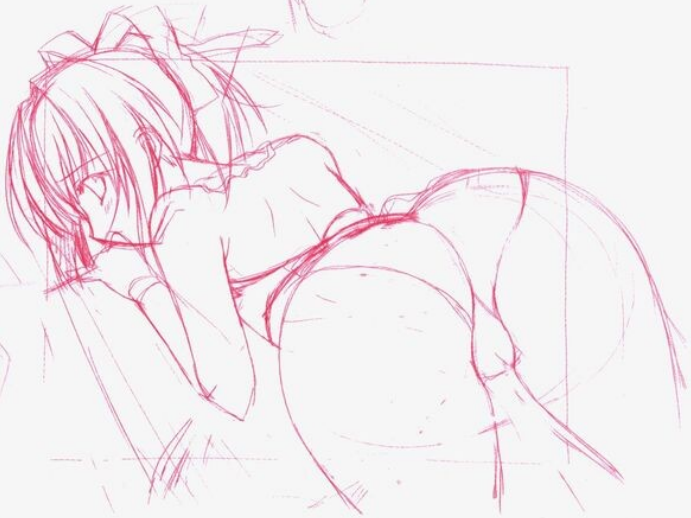
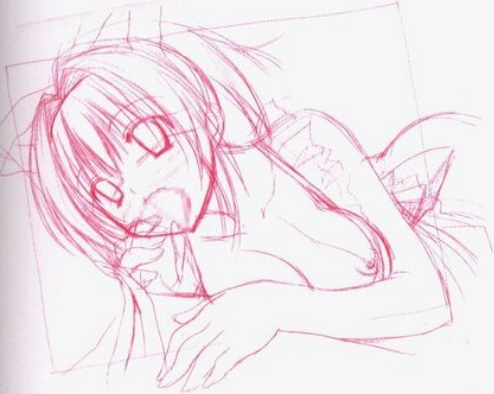
あすかのチャームポイントといえば、ポニーテールとそれを結ぶネコミミっぽいリボン。ゲーム画面ではトリミングされて映っていないことも多いので、これらの線画でじっくり堪能しよう。





**EXTRA MEMORIES**





EXTRA MEMORIES

## エミリー・ウィンスレット

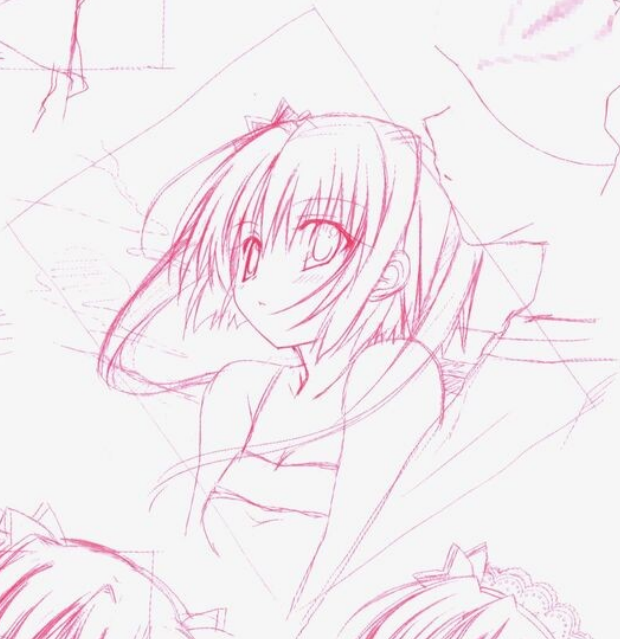
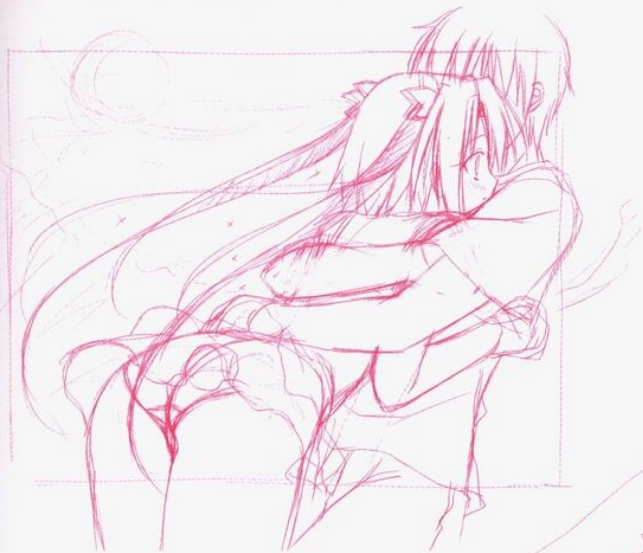
微妙にアブノーマルな感じのシチュエーションが多いエミリーのイベント。画面外の部分まで描かれている線画では、そんな彼女の扇情的な体位なんかもバッチリ確認することができるのだ。





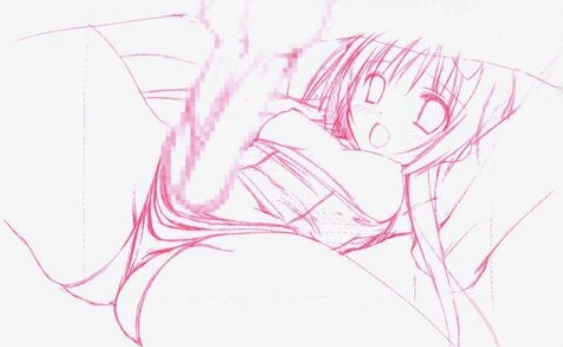
**EXTRA MEMORIES**

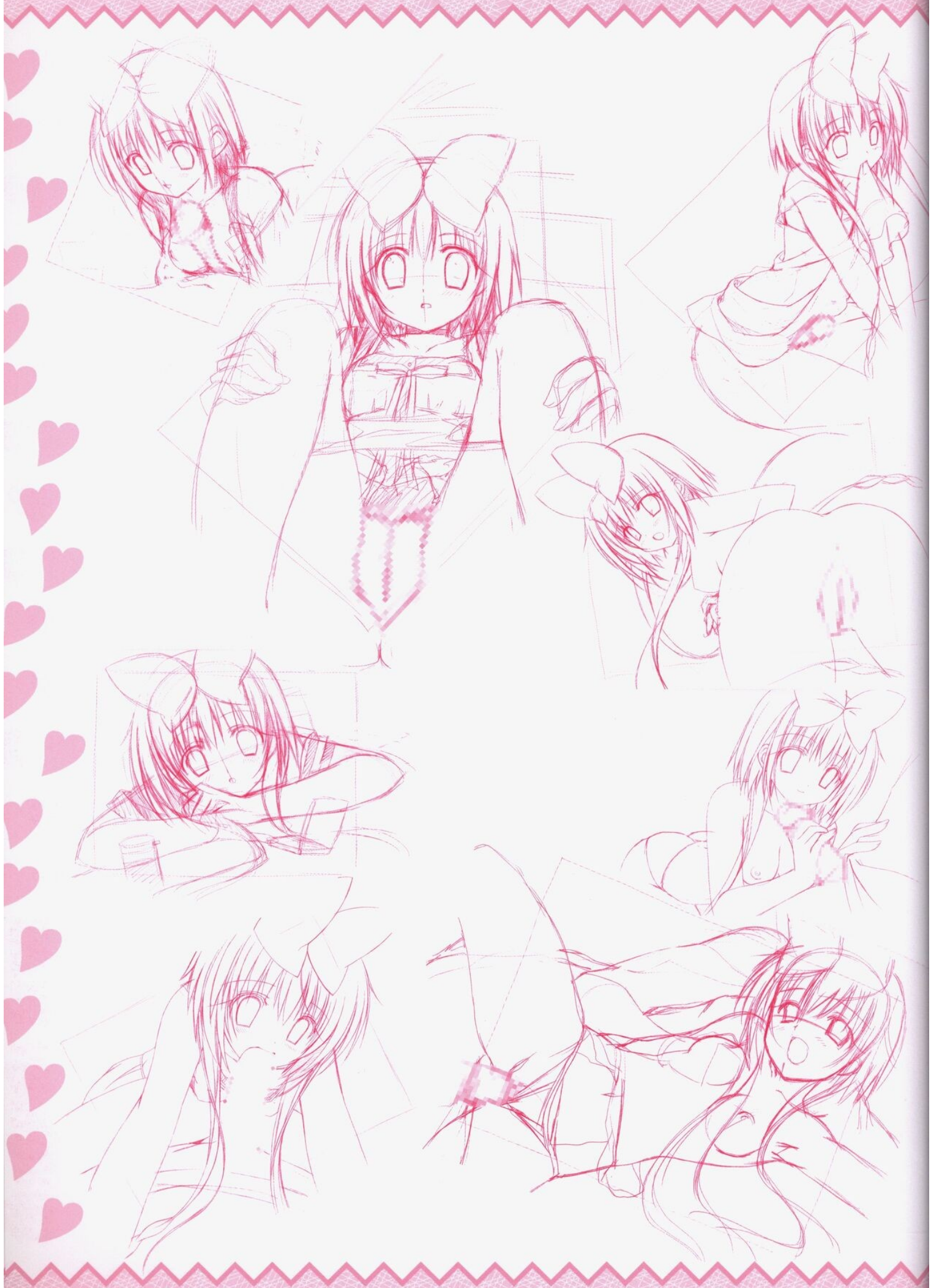


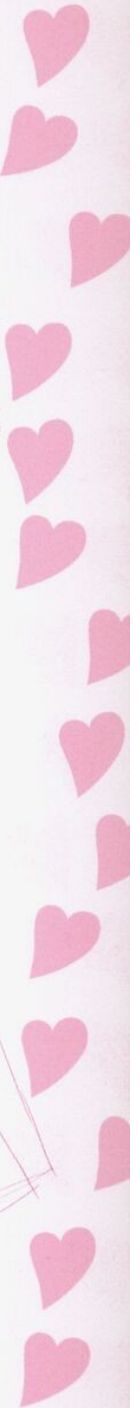
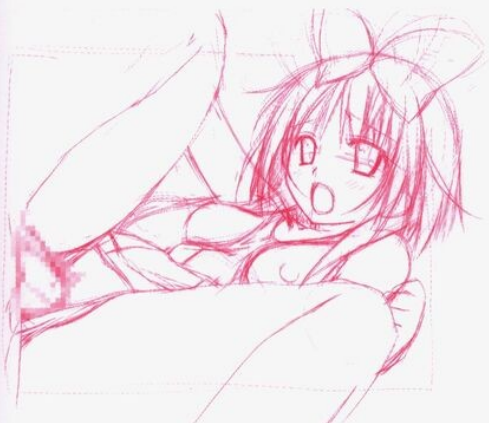
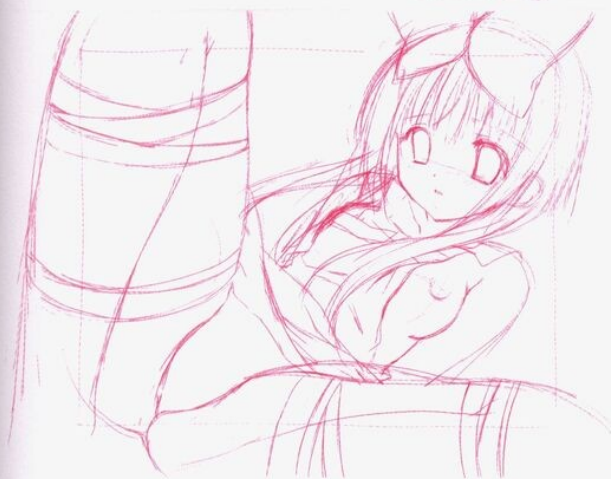


### 御堂琴音

癒し系おっとり娘の琴音には、やさしいタッチの鉛筆線画がよく似合う。蝶のようなでっかいリボンの動き(?)や、長〜い三つ編み(?)の広がりなどにも注目してみよう。





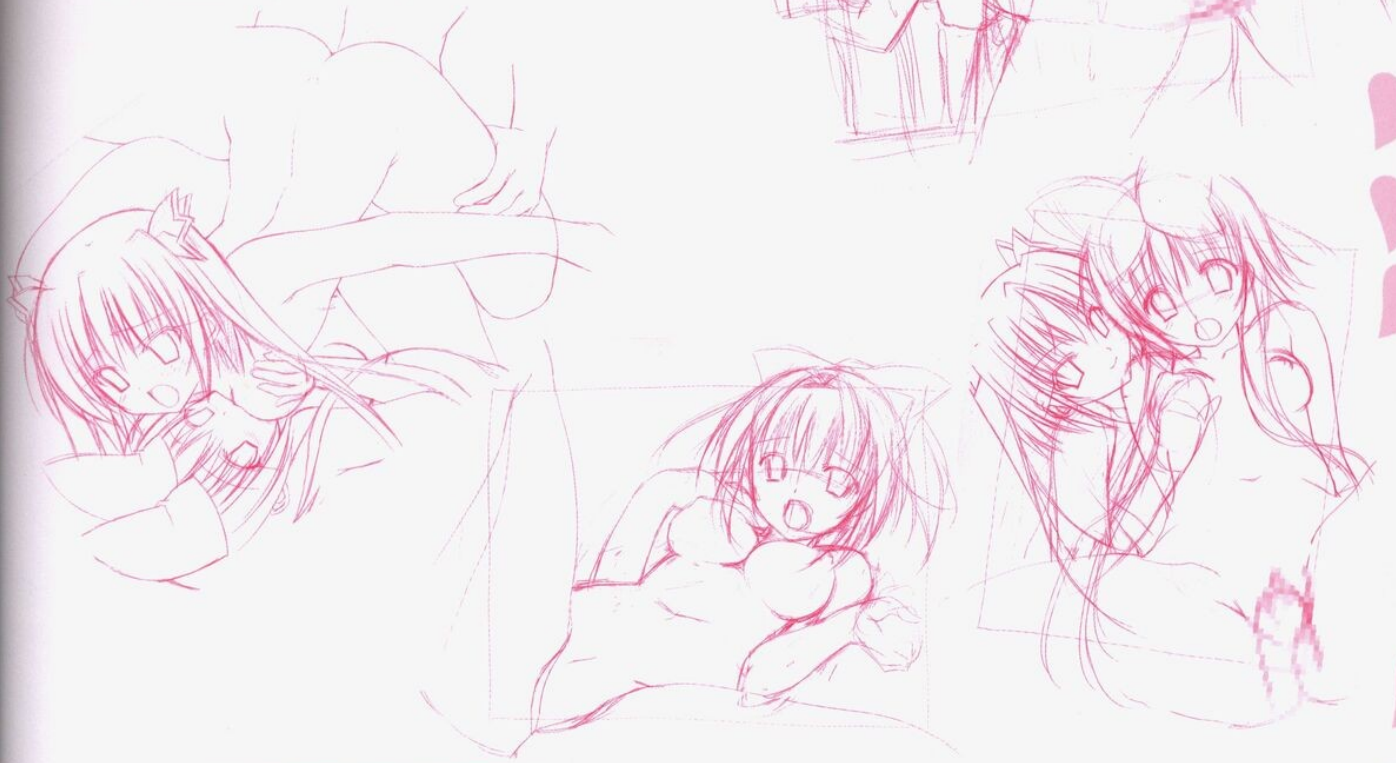


**EXTRA MEMORIES**



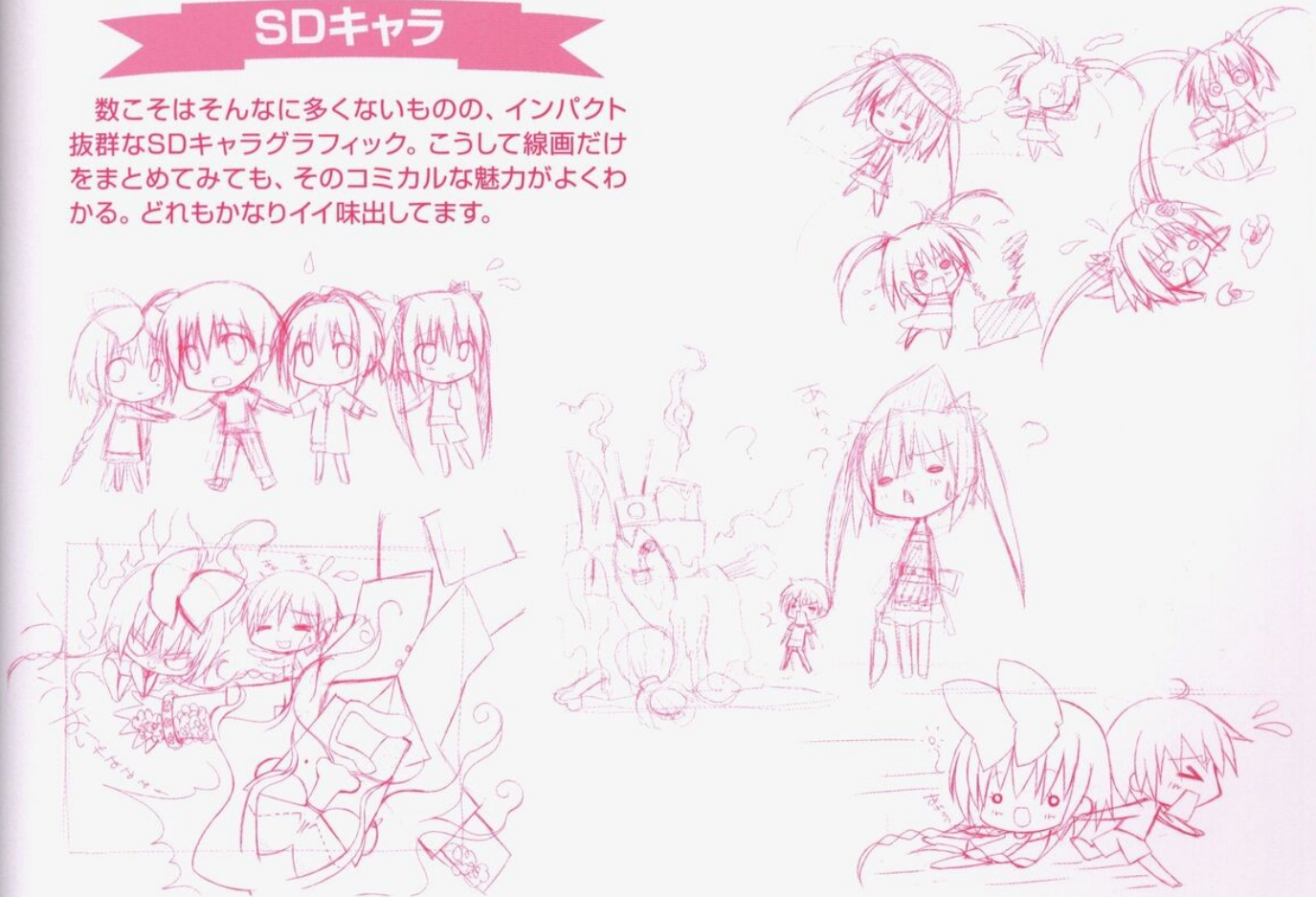
## ハーレム

なんといっても、幼なじみ同士のからみが魅力のハーレムルートイベントのグラフィック。キャラクター同士の位置関係をチェックしつつ、あれこれ妄想を膨らませてみるのもありかも？



## SDキャラ

数こそはそんなに多くないものの、インパクト抜群なSDキャラグラフィック。こうして線画だけをまとめてみても、そのコミカルな魅力がよくわかる。どれもかなりイイ味出しています。



# VOICE ACTRESS'S COMMENT

## 魅力的なヒロインを演じた声優さんにインタビュー～!!

### Questions

- Q1: キャラクターのイラストを見ての第一印象は?  
 Q2: 実際に演じてみての感想は?  
 Q3: 演じたキャラクターとの間に、共通点や正反対の部分などはありましたか?  
 Q4: 収録時に気をつけた点やおもしろいエピソードなどはありましたか?  
 Q5: お気に入りのイベントシーンは?  
 Q6: ファンにぜひ聞いてほしいセリフは?  
 Q7: 音を振り返ってみて、自分自身どんな子供だったと思いますか?  
 Q8: ヒロインのように幼なじみはいましたか?  
 Q9: 子供の頃の遊びで印象に残っているものは?  
 Q10: ファンへのメッセージ

### 楠鈴音 as 涼風あすか

- A1: ぶにぶにして、かわいい～!
- A2: 気持ちが行動に出やすく、表情もコロコロ変わって、演じてて楽しかったです。
- A3: 共通点は、からかわれるとムキになってやりすぎちゃうところ。正反対なのは、口より先に手がでるところ。暴力はよくないよ～。
- A4: ノリよくテンポよく。うるさいだけの子にならないよう気をつけました。収録時は必死だったので、おもしろいことはなかったと思います。たぶん。
- A5: 夏海タワーに閉じ込められたふたりのシーン。ドキドキしました。
- A6: 甘いセリフもいいけど、あすかの数々の雄叫びを聞いてください～。
- A7: 小学生のときは、近所の男の子集団に混じって外で遊びまくってました。活発な子でした。中学に入ったら、ぼったり男の子とは遊ばなくなり、口も聞かなくなりましたね～。
- A8: リーダー格B君とT君。ちなみにT君のおばさんには「嫁に来ない?」と誘われました(笑)。
- A9: 一度だけ、団地の子供達全員で、夜中に陣取りをしました。すごく楽しかった記憶があります。このとき大人たちは宴会中。お花見みたいな状況でした。
- A10: 甘～くエッチに過ごせましたか? これからも、アトリエかくやをよろしくお願いします～。

### 北都南 as 御堂琴音

- A1: めちゃめちゃかわいくてびっくりしました。
- A2: もちろんカワイイですヨ♥
- A3: 共通は関西弁ってトコだけ(笑)。あとは……あんなにかわいくなくてゴメン(汗)。
- A4: かわいいイントネーション♥
- A5: すべて! ……と言っておこう(笑)。
- A6: 全キャラ全セリフ♥ あますところないよう、ご堪能ください(笑)。
- A7: 男の子みたいで、毎日野球やりました(笑)。

### 安玖深音 as エミリー・ウインスレット

- A1: 金髪ツインテールで気の強そうな女の子に見えたので、ツンデレちゃんかな? と思っていました。
- A2: いざ台本を読んでみたら全然ツンツンしてなくて、むしろ優しいし明るい空気読めるしなんていい子なんだろうと思いました。ただめっちゃめっちゃテンションの高い子なので、冬収録だったのに汗をかきかき息切れしながら収録していたのを思い出します。
- A3: わりとあっさりした性格は似ているかもしれませんが、でもエミリーほど精神力は強くないので、そこが正反対なところでしょうか? なかなかできませんよ! いくら好きな男の子のためとは言え、あそこまで日本語ペラペラになったり日本まで追いかけてきちゃったり……。
- A4: 収録に入った時に、メーカーさんに恐る恐る「あの……アメリカ人なんですよ……? このカタカナ英語はどうしたら?」と確認したんですよ。私英語なんてしゃべれないので。そうしたら素敵な笑顔で「日本語英語で大丈夫ですよ!」とってもらえてホッとしたのを覚えています。でもそれっぽく読んだほうがいだろう台詞はそれっぽく読もうと努力はしたのです……。あれが限界でした。ごめんなさい。
- A5: ホラー映画か心靈番組をみんなで観るシーンがあるんですが、そこでエミリーがまったく悲鳴の上げどころじゃないところでわーわー騒ぐんですよ。「トンネル!」とか(笑)。そこがすごくかわいいと言うか、私のお気に入りのシーンですね。
- A6: う～ん、何かなあ? あえて、他の女の子のルートで深く身を引くところとかですかね? 寂しいんだけど、悲しいんだけど、主人公くんが幸せなのが嬉しいから応援してあげるエミリーがとても素敵なので。
- A7: ひねくれてましたね～! かわいくない子供だったんじゃないかな、と(笑)。あと、とても頑固な子供でした。嫌いな食べ物は徹底して食べない子だったと母から聞きました。
- A8: いました! なんと幼稚園から小学校までずっと同じクラスだったんですよ! 私が引越してしまったので中学校でお別れしちゃいましたが、しばらく文通みたいなことはしていましたね。彼は今何をしているのやら……。
- A9: 私、おままごとが大好きな子でした! 今と通じるものがありますよね。三つ子の魂百までということでしょうか。決まって私がやりたがったのは一番上のお姉ちゃん。ひとりっ子だったから、兄弟がほしかったのかしら?
- A10: ども! 安玖深です☆ たぶんこれを読んでいる方のほとんどはプレイされたんですかね? いかがでしたでしょうか、うちのエミリーちゃんは? いい子だったでしょう! まだあすかちゃんと琴音ちゃんしか攻略してないという方は、ぜひエミリーちゃんENDも見てみてくださいね♪ かわいい幼馴染ちゃんたちと素敵な日々を送ってください! ではでは。。。m( )m

A8: 同い年の女の子しかいなかったですねー。

A9: 野球(笑)。あと女の子っぽいところでは、ゴムとびとか?

A10: どの子もこれ以上ないくらいのかわいさ! 皆様もぜひぜひ彼女たちとの甘々な日々を過ごしていただけたらと思います。楽しんでください。

# CAPTURE GUIDE

## 攻略ガイド

攻略チャートを大公開!  
全イベントを制覇しよう!

### 攻略チャートについて

1. バッドエンドルートは存在しません。
2. 各キャラの6月22日の選択により、個別ルートとハーレムルートに分岐します。

#### あすかの場合



6月18日	あすかの部屋
6月19日	玄関
6月20日	庭
6月21日	玄関
6月22日	玄関 俺が嫁にもらってやる
6月25日	ベランダ
8月22日	服を取りに戻る *あすかEND1 生乾きの服を着る *あすかEND2

あすかルートでは、主人公には今までは見ることがなかった、積極的にエッチに臨む姿を見ることができる。



←着替えを取りにいくかいかないかによって、ルートが分岐することになる。

#### 琴音の場合



6月18日	リビング
6月19日	玄関
6月20日	洗面所
6月21日	キッチン
6月22日	琴音の部屋 いや、どうでもいい
6月25日	琴音の部屋
8月22日	琴音の実家へ行く *エミリーEND1 琴音の実家へは行かない *エミリーEND2

健気に主人公の願いを聞き入れてくれる琴音だが、笑わせてくれるコメディ的なイベントも用意されている。



←琴音の実家に行くか行かないかによって、EDが変わることになる。

#### エミリーの場合



6月18日	自分の部屋
6月19日	洗面所
6月20日	風呂
6月21日	2階廊下
6月22日	エミリーの部屋 何も言わない
6月25日	自分の部屋
8月22日	くっと堪えて日記を見ない *エミリーEND1 未練がましく日記を見たくなる *エミリーEND2

積極的過ぎてドジったりと、笑わせてくれるイベントもあるが、家族への想いが語られる感動の場面もある。



←離れ離れになりそうなエミリーを、行かせるかどうかで後の状況が変わる。

### ハーレムルートについて

ハーレムルートに入るには、全員のイベントをこなしておく必要がある。あすかルートでは「今度皆でお医者さんゴッコ」、次に琴音ルートで「みんなでやりたい」、最後にエミリールートで「今度皆と一緒にやろう」を選択していくと、夢の展開に進めるのだ。



←あすかルートの選択肢でセーブしておくとなりに進めるだろう。



←ハーレムルートは、3人の幼なじみとエッチできる。

## THEME SONG INTRODUCTION

### 主題歌紹介

ゲーム本編を盛り上げる、ポップな主題歌を大紹介!

#### キラン★とねっ

作詞: kanoko  
作・編曲: 菊田大介 (Elements Garden)

Vo: 片霧烈火



愛・愛・愛甘えちゃう  
そんなしゅきは君を  
ドキ・ドキ・ドキさせちゃうからね  
気をつけなさい

注意事項のね その1は  
とりこになったら  
私をぎゅっと抱きしめなさい

背筋をピンと伸ばし  
ラン♪「君が大好きよ」  
分かってることはそれだけよ  
ずっと一緒にいたい…  
きゅん♪「代わりに言っよ」  
見上げた一番星 キラン★とねっ。

ウル・ウル・ウル見つめちゃう  
そんな瞳は君を  
グン・グン・グン引き寄せちゃうよ  
気をつけなさい

注意事項のね その次は  
とりこになったら  
誰より近くにいると誓って

大きな声で言うよ  
ラン♪「君が大好きよ」  
大切なものはそれだけよ  
目に見えるもの全て  
きゅん♪「君と見ていたい」  
光った流れ星に キラン★とねっ。

背筋をピンと伸ばし  
ラン♪「君が大好きよ」  
分かってることはそれだけよ  
ずっと一緒にいたい…  
きゅん♪「代わりに言っよ」  
見上げた一番星 キラン★とねっ。



# SHORT NOVELS

## ショートノベル

今度は、魔法のゲーム？  
エッチな遊びは異世界へ!?

### The 1st Chapter あすか編

著 藤山恵司



## 視られて感じて

ゲームの呪いで、異世界に飛ばされた、  
荘介とあすかの運命は？

「ねえ、荘介。これって覚えるかな？」

訳あって同居中の幼なじみ、エミリー・ウィンフィールドが、小首を傾げながら「幼なじみと甘〜くエッチに過ごす方法」と名づけられた日記帳を荘介に差し出してきた。

「おう、今度はどんなアシな遊びだよ？」

エミリーから日記帳を受け取った荘介は、開かれたページを読み、やはりエミリーと同じように怪訝な顔を見せる。

「今日は、あすかと琴音とエミリーと一緒によくわからないゲームで遊んだ。いろんなことがあって、とても楽しかった」

「……なんだこりゃ？」

「ね？ なんかおかしいでしょ？ わたしがあすかや琴音と会ったのって、ついこの前のことだし……」

そう、荘介の3人の幼なじみが出会ったのは、ごく最近のことで、それ以前は互いの存在すらも知らなかったはずだ。

「ふたりとも、どうかしたん？」

「言っとくけど、抜け駆けはナシだからね」

荘介とエミリーのやり取りに気づいた御堂琴音と涼風あすかが、ふたりの元に寄って来る。ちなみに、琴音はエミリーと共に荘介と同居中。あすかはお隣さんとして、幼なじみとしての最長記録を更新中である。

「ばっか。そんなんじゃないって。それよりさ、おまえらはコレに覚えはあるか？」

荘介は、日記の奇妙な記述を琴音とあすかのふたりにも見せた。やはり、それを読んだふたりの反応は、荘介やエミリーと同じものであった。

「……これ、うちの記憶にはないなあ」

「実際、ありえないわよ、こんなの。……でも、この適当な絵と汚い字は、確かに昔の荘介のヤツよねえ」

琴音とあすかは、まじまじと日記を眺めながら、それぞれ首を傾げて見せた。

**「あ、わかった！ 犯人は……荘介よ!!」**

いきなり、パンッ！ と両の手を叩き合わせたあすかは、まるでどこぞ名探偵であるか

のように、ピシッと人差し指を荘介の面前に突きつけた。

**「え？ 俺？ つか、犯人ってなんだ!？」**

「そんなの決まってるじゃない。これは、子供の頃の荘介が、寝ぼけて書いたモノよ。だって、その小汚い字と絵は明らかにあんたのモノでしょ？」

「ああ、なるほどなあ」

琴音が子供の頃の荘介の字を眺めながら、しみじみと頷いた。

「どうせ俺の字は、今も昔も下手だよ……」

あっさりとなだめられてしまい、軽くへこんでしまう荘介であった。

「そうになると、犯人はダーリンしか考えられない……か。確かに筋は通ってるけど……」

「だから、犯人とか言うな。……って、エミリーはなんか納得してないみたいだな」

「うん。実はね、ダーリンにもまだ言ってなかったんだけど……あるんだ」

「ある？」

「えっと、その……」

エミリーのたおやかな指先が、スッと幼い頃の荘介が書いた絵を指し示す。それは、ボードゲームのようなモノを囲んだ、子供たちの絵であった。

「日記で遊んだとか言ってる、そのなんだかよくわからないゲーム……なんだけど」

**「「「はいいいい??」」」**

エミリーを除いた全員の声がキレイに重なる。自分も何と反応していかかわからないようで、エミリーはただ苦笑をしていた。

☆ ☆ ☆

「本当にあったわね……」

「……だな」

呆気にとられたあすかの声に、同じように呆気にとられた荘介が同意する。

エミリーがリビングに持って来た件のゲームというのは、古ぼけた木製のケースに収められたボードゲームであった。ソレからは、日記帳に描かれていたモノと同じような印象

を受ける。

「それにしても……妙に凄味があるゲーム盤やなあ」

「確かに、妙に雰囲気のあるゲーム盤だな。アンティークの類なんだろうが……呪いのアイテムとか言ったほうが、しっくりくるぜ」

「ちょっと、変なこと言わないでよ」

いつの間にか、荘介の後ろに回っていたあすかが、露骨に嫌そうな顔を見せた。

「ははっ、冗談だっ。……ところで、エミリーは、どこでこんなのを見つけたんだ？」

「わたしの部屋だよ。部屋の整理をしてたら、見つけちゃったの」

今、エミリーが使っている部屋は、元は物置代わりにされていた部屋だ。しまわれたモノが、そのまま忘れ去られていたとしても、それほど不思議ではない。

「う〜む、やっぱり記憶にはないが……日記にそれらしい記述がある以上、俺はこれで遊んだってことか。しかし、俺は誰とこれを遊んだんだ？」

日記の記述に従うなら、あすか・琴音・エミリーの3人ということになるが、どう考えてもそれはありえないのだ。

「まあ、そんな細かいことは別にいいんじゃないかな？」

そんな荘介の疑問を、あつけらかんとした口調で一刀両断にしたのは、コレを発見した張本人——エミリーであった。

「いや、よくはねえだろ」

荘介の的確な突っ込みを無視して、エミリーは言葉を続ける。

「当面の問題は、コレで遊んだという記録が日記に残ってることだよな。なら、当然、コレで遊ぶことも『真の幼なじみ決定戦』に含まれてくるわけだよな？」

「そやね。それは……そうなるわなあ」

さもあらんといった様子で、琴音が何度も頷いた。そんな琴音とエミリーに、あすかが食ってかかる。

「な、なんでそんな話になるわけよ？ 日記の記述だって、限りなく嘘っぽいのに」

「日記の内容が嘘だからノーゲームになるなんて、決めてなかったはずだよ？」

「いや、それはまあ……そうだけど。なんかこのゲーム、気味が悪いじゃない」

「そっかな。わたしは迫力があって、おもしろそうだと思うけど……あ、ひょっとして、怖気づいたちゃったの、あすか？」

何かを察したエミリーが、ニヤリと嫌らしい笑みをあすかに見せる。どうやら、それは凶星を突いていたようで、あすかの肩がびくりと震えた。

「そ、そんなことあるわけじゃない!?」

「本当かなあ〜? あすか、怖いのはダメだもんね」

クスクスと小悪魔めいた笑みで、あすかをからかうエミリー。もっとも、そう言う彼女も、それほどホラーなシチュエーションに耐性があるわけではないのだが。

「じゃあ、私もこのゲームに参加するわ! こ、怖くも何ともないから、全然平気よ!」

「そお? ま、ゲームは人数が多いほうが楽しいしね☆ じゃ、ゲームの準備をするねえ」

「……あっ」

嬉々として、ゲームの準備を始めるエミリーを見るあすかの顔には、明らかに「やってしまった」的な表情が浮かんでいた。

荘介はそんなあすかの肩をポンと叩き、口元に苦笑を浮かべながら、ふるふるとかぶりを振った。彼は、言外に「まあ、そう気を落とすな」と言っているようだ。

「はうう……」

相変わらず、不気味な空気をまとうゲーム盤にちらりと視線を送り、あすかはダツと滝のような涙を流すのであった。

☆ ☆ ☆

「ふうん、要はスゴロクと同じか……」

英文で書かれた説明書を眺めながら、荘介はポツリとそう呟いた。一応、彼は帰国子女であるため、この程度の英文は簡単に読めてしまうのだ。

「エミリー、この辺、俺には読めねえんだけど……わかるか?」

「えと……これ、英語じゃないよ。ドイツ語……スペイン語かな?」

「ふうん……なんかの注意書きっぽいけど、まあいいか」

荘介は説明書を傍らに置き、ゲーム盤を囲む面々に視線を巡らす。

やる気満々のエミリー、そこはかたなく楽しげな琴音、半ばヤケになったあすか——当の荘介はと言えば、こういうゲームは嫌いではないだけに、密かに高揚感を覚えているのも確かであった。

「みんな、好きなコマを取ってくれ」

「あ、これ、なんか荘介に似てるよお。荘介はこれにしようよ」

エミリーが荘介のコマとして、勝手にゲーム盤に置いたのは、コケシのスケールをそのまま縮めたような代物であった。これが、荘介に似ているのかと言えば、それは個人

の感性にお任せするしかないだろう。

「うおっ、俺ってこんなにシュールな顔してるか? 微妙にヘコむ……」

「あはは♪ 嫌だったら別に代えてもいいよ……って、あれ?」

エミリーは盤からコマを外そうとするが、どんなに力を入れても、それが外れる気配はない。

「磁石でくっついてるのかな?」

「いや、俺は別にそれで構わないぜ。ひと目で自分のコマだとわかるから、ある意味、やりやすいな」

「そお? じゃあ、いいんだけど……」

エミリーは不思議そうに小首を傾げていたが、やがて自分のコマ選びに没頭し始めた。

それぞれのコマが決まり、完全にゲームを開始する体勢が整ったのは、それから間もなくのことであった。

「よし、最初は俺からな」

荘介がサイコロを放ると、それは4の目を出して停止した。

「1、2、3、4……えっと、このマスは……『ふたつ以上のコマが止まった時、秘境への門が開かれる』か」

「それ、どういう意味よ?」

「……さあ? 説明書に書いてあるんだろうけど、どの道、今は何も起きないから、調べるまでもねえだろ」

怪訝な顔をするあすかを見やり、荘介はひよいと肩を竦ませた。

「説明書くらい、始めにしっかり読んでおきなさいよ……」

言って、あすかは軽く嘆息する。どうやら、彼女は荘介と違い、説明書をよく読んでからゲームを始めるタイプようだ。

「じゃ、次はうちの番な。えいっ」

琴音が小さなかけ声と共に、サイコロを放る。コロコロとテーブルの上を転がったそれは、やがて5の目を出して停止した。

「ちょっぴり、旦那様をリードや♪」

「む、まだ勝負は始まったばかりだぞ。ところで、マスには何て書いてあるんだ?」

## 「えっと……『右隣に座るプレイヤーの下着を脱がす』や」

場が何とも言えない沈黙に包まれる。

「……琴音、そこは笑うトコか?」

「うん、ホンマにそう書いてあるんや」

全員の視線が、琴音のコマが止まったマスに集中する。そこには、確かに琴音が読み上げたものと同じ文章が存在していた。

「うお、マジだ……」

「なによ、このエロゲーム」

あすかが露骨に呆れた声で呟く。何とい

うか、アンティーク風な外観に似合わない、妙に俗っぽい指示であった。

「これ、どうするよ?」

「ゲームの指示やし、やっぱ、従わなあかんかなあ……」

琴音の右隣に座るのはエミリーだ。この場合、琴音がエミリーの下着を脱がすことになってしまう。

「従うって、琴音……いくら女の子同士だからと言っても、そんなのは立派なセクハラだぞ……」

口では否定的な意見を述べながらも、とりあえず、荘介は、琴音がエミリーの下着を脱がしている禁断の光景を夢想してみた——。

「あ、ちょっと……やめてよ、琴音……」

「エミリーって、色っぽい下着を穿いてるんやなあ。これに比べたら、うちの、ちょっと子供っぽいかもしれんわ」

「へ、変なとこ触らないでよ……感じちゃ……ひゃうっ!」

「……あっ、エミリーのここ、じんわりと染みが広がってるう……ひょっとして……濡れてるん?」

「そんな……やっ、ダメ……これ以上、されたら、私……」

「——いや、俺的にはそれでオッケーかも」

瞳をキラキラと輝かせた荘介が、ぐっと親指を突き立てる。

## 「って、オッケーじゃないでしょ!」

「ぶっ!」

そんな彼の脳天に、ズビシッ! と、あすかのチョップが突き刺さった。

「いや、冗談だって。冗談」

「どうだか。目が本気だったわよ」

あすかは、一向に視線を合わそうとはしない荘介を、じと目で見やる。この場合、彼女の判断は全面的に的を得ていたわけだが。「そやねえ……旦那様の下着を脱がすんならともかく、エミリーの下着を脱がすんは、うちも抵抗あるかなあ……」

のほほんとした琴音の言葉を聞いた荘介とあすかは、何となし彼女のほうに視線を送り、そこで繰り広げられているトンでもない光景に絶句した。

「ちょ、琴音ってば! やめっ……!」

エミリーのスカートの中に頭を突っ込んだ琴音が、強引に彼女の下着を引っぱがそうとしている。

「って、言ってることと、やってることが違うし!」

しばしその光景に見入ってから、荘介が突っ込みを入れる。この辺、彼も健全な男の子なのだから仕方ない部分だ。

「な、なにやってんのよ、琴音!？」

顔を真っ赤にしたあすかが、わなわたと琴音を指差す。

「へ? うち……あれ??」

エミリーから下着をはぎ取った琴音が、きょとんとした顔をしている。それは、自分が今まで何をしてたのか理解できない——そんな様子であった。

「うう、お嫁にいけないよぉ……」

涙目になったエミリーが身体を起こそうとした拍子に、彼女の足がテーブルに当たり、盤上のサイコロが転がり落ちる。

露になったサイコロの目は6——エミリーが触れていないにも関わらず、彼女のコマは勝手に目的のマスまで進んだ。

「お、おい!? 今、エミリーのコマが勝手に……って、ソコはまた何をしてるんだぁ~~~~!!」

荘介がゲーム盤からエミリーに視線を戻せば、今度は、エミリーが琴音を羽交い絞めにして、彼女の胸を揉みだしているという、百合なイベントが進行中であった。

「か、身体が勝手に動いて、止まらないんだよぉ……!？」

「はっ……やっ……エミリーの手、とってもやらしいわ……」

困惑するエミリーとは対照的に、琴音は実に気持ちよさげに頬を赤らめていた。

「お、おい!? エミリー、琴音をあんまり感じさせるな。琴音はあんまり感じるな。俺の愛撫の時より気持ちよさそうで、何だかちよっぴり羨ましいぞ!？」

「あんた、混乱しまくって、自分が何を言ってるのかわからないでしょ?」

「い、いや、俺は至って冷静だ。取り乱してなんかしてないぞ!」

荘介は傍目にわかるほど、狼狽しまくっており、その説得力は皆無に等しい。

「そうだ! もしかして……案の定か」

エミリーの奇行の原因に察しがついた荘介は、先程、彼女のコマが停止したマスを見る。そこには「左隣のプレイヤーの胸を揉む」と書かれている。

「そ、荘介……このゲーム、なんかヤバくない? もう遊ぶのはやめたほうが……」

「そうだな……触らぬ神にタタリなして言うし、ここは……って、言ったソバから何をしますか、あすかさん!？」

「へっ?」

怯えの入った表情のまま、なぜかあすかはサイコロを転がしていた。

「え? なんて? 私、何してんの??」

混乱するあすかをよそに、サイコロの目は6を指し示した。

## 『オッケー! 秘境への門を開くぜ!』

どこからともなく、くぐもった若い男の声が聞こえてくる。瞬間、ゲーム盤が眩い光を

放つ。声を上げる暇もなく、荘介とあすかは、その光の中に飲み込まれてしまった。

☆ ☆ ☆

「……ここは?」

意識を取り戻した荘介が始めに見たのは、東南アジアにあるような石造りの巨大な神殿だった。彼は今、その祭壇のような場所に横たわっているのだ。

「気がついたのね……よかった」

あすかが、心配そうに荘介の顔をのぞき込んでいる。

「お、おう……ここは、いったどこだ?」

ここに至り、彼女に膝枕されていることに気づいた荘介は、照れ隠しに今の状況を尋ねた。

「わかんない。でも、こっで……どう見ても日本じゃないよね?」

「どうもよくわからんが、この状況がヤバイってのは確かだな……とにかく、俺から離れるな、あすか」

「う……うん」

「困ってるね、おふたりさん。そんなキミたちに救いの手を差し伸べてあげよう!」

途方に暮れたふたりの眼前に、やおらボワワンとカラフルな煙が生じた。そして、その煙の中からひとりの男が姿を現す。

「呼ばれて飛び出て、じゃんがじゃんがじゃんが! ゲームの精、ここに推参!」

荘介は、ゲームの精と名乗るこの男に見覚えがあった。むしろ、見覚えがありまくって困ってしまった。

「……なにやってんだ、浅野?」

「バカやってんじゃないわよ、浅野」

荘介とあすかの冷たい突っ込みが、自称ゲームの精に叩きつけられた。

「ち、くわぁ〜う!! 俺は浅野のようで、そこはかたなく浅野ではない。むしろ、アサノモドキと呼んでもらおう」

「あ〜……アサノモドキ?」

「そこ、可哀想な眼で俺を見るな!? ゲームのナビゲーターを蔑ろにすると、七代飛んで、八代目をようやく呪うぞ、こらぁ!」

「ちょっと待って!? あんた今、ゲームのナビゲーターがどうかって……?」

荘介が思いっきり聞き流して言葉を、あすかが耳聡く聞き留める。ようやく真っ当な反応が返ってきて、アサノモドキは心底嬉しそうな顔を見せた。

「その通お〜り! おまえらが今、絶賛プレイ中のゲームは、実はすっげえイカス魔法のゲームなのでした。よかったな!」

「浅野のバカ発言なんて、いつもは信じないが、今回は……だ」

荘介は唖然のように眩きをもらす。琴音とエミリーの異常、眼前に広がる異様な世界——現実離れた事態だが、ここに至ってはそれを信じないほうがナンセンスだ。

「さて、いきなりハードなイベントに遭遇した

おまえらに朗報だ。この世界を抜け出す方法……それは、神殿に祭られた神を満足させることだ」

「神を満足させる?」

「とりあえず、神官に従っておけよ。そうすりゃ、イベントはクリアできる。じゃ、健闘を祈ってるぜ!」

言うだけ言うと、アサノモドキは現れた時と同様、カラフルな煙を発して姿を消した。「神官とか言われても……」

荘介が辺りを見回そうとしたその時、神殿のかがり火に一齐に火が灯された。

「うっほ、うっほ、うっほ、うっほ……」

不気味な声が、神殿に響き渡る。いつの間にか、荘介とあすかは何者かに囲まれているようであった。

「サ、サル……?」

あすかは荘介の腕にぎゅっとしがみつくと、どこに隠れていたのか、神殿の至るところから大柄な猿たちが姿を現す。

「この神殿は、サルの縄張りかよ……」

荘介は、あすかを守るように立ち尽くす。やがて、遠巻きに彼らを見ていた猿の一群から、ひと際巨大な猿が歩み寄ってきた。

「うほっ!」

その猿は何かを描かれた石盤を、荘介とあすかに突きつけた。

「ひょっとして、このサルが神官かよ? ということは、コイツの指示に従ってればいいわけだな」

「でも、あの石版の絵って……」

デフォルメされた男女。女が豊かな胸で、男の股間から伸びた棒を挟み込んでいる。

「どう見ても、バイズリだな」

「うき—————!!」

それが正解と言わんばかりに、猿たちから歓声(?)が沸き上がった。

「……これ、コイツらの前でやるのか?」

「うほっ!」

わずかなりとも言葉が通じているのか、神官ザルはえらく大仰な仕草で頷いた。

「こ、このエロザルがぁ~~~~!!」

「ちょ……待て、あすか!? いくらおまえでもアレに突っ込みを入れるのは無謀だ! あの大きさのサルの力は半端じゃねえぞ!!」

荘介は逆上して神官ザルに殴りかかろうとしたあすかを、必死で押さえつける。

「で、でも……コイツらの前でその……バイズリするなんて……」

「やらなきゃ戻れないなら、やるまでだろ。琴音やエミリーも心配してるだろうしな」

「荘介がそう言うんなら……」

あすかはぎらついた猿たちの眼を気にしながら、上着とブラを脱ぎ、形の良い胸を外気に晒した。

「じゃ、頼む……」

石畳に横になった荘介は、ズボンのジッパーを開き、脱力したペニスを露にさせた。

「荘介……ふにゃふにゃなんだけど……」

「……う、スマン。サルが気になって、思うよ

うに起ってくれん……」

「仕方ないわね……これなら、どう？」

あすかの柔らかな指先が、荘介の股間を弄る。指を通して、あすかの温もりが伝わってきた。ピクリと荘介のペニスが跳ね上がる。「あ、感じてきた……？」

「……ん、もうちょっと、だな」

起き上がり始めたペニスを握り、あすかはそれを上下にさする。

「……はあ……はあ……どう？」

「もっと、強く……」

いつの間にか、あすかの吐息には、甘い色が宿り始めていた。俄然、ペニスを愛撫する動きにも熱が入ってくる。

「そろそろ……いいかな」

「うん、わかった」

熱っぽい息を吐きながら、あすかは荘介の股間に胸を寄せ、今や天を衝くばかりにそぞり立ったペニスをその谷間に挟み込む。

「んっ……んっ……滑りが悪いかな……？」

小首を傾げたあすかは、やおろ口腔に荘介のモノを含んだ。

「うあっ!？」

ぬるりとした、生温かい粘液の感触が、ペニスを包み込む。不意の快感に、荘介は背中が石畳で擦れるのにも関わらず、ピクピクと仰け反ってしまう。

「ん……むちゅ……ちゅ……はあっ、こんな感じていいかな？」

あすかは、己の唾液でてらてらと光る荘介のペニスを、再び胸に挟み込む。唾液が潤滑油の代わりになったようで、今度はスムーズに荘介に快楽を与えることができる。

じゅっ、じゅっ、じゅっ……

胸の谷間で、粘液が擦れる淫靡な水音が響き渡る。

「お……おあっ……はあっ……!」

あまりの快感に、言葉にならない声が荘介の口からもれる。

「うっ! ……ん、んん〜」

快楽に身を委ねていた荘介の顔に、苦笑じみた表情が浮かんだ。

「はあ……はあ……どうかした？」

「いや、さ……」

荘介の視線が、ぐるりと周囲を巡る。行為に没頭して忘れかけていたが、猿たちがじっと自分たちを見つめていた。心なしか、さっきよりも猿たちの囲みが狭まっているような気がする。

「……え? やあ……」

相手が猿とはいえ、見られていることには違いない。あすかの顔が、一気に羞恥に染まり上がる。

「これ……いつまでやればいいのか？」

「やっぱ、俺がイクまでかな……？」

「じゃ、さっさとイキなさいよ」

「……んなこと言われてもなあ」

荘介のペニスは、快楽を享受し足りないよ

うで、いまだ堅さを保ち続けている。

「それなら、これは……どう？」

胸に収まりきらないペニスの先端を、あすかの舌がチロチロと這い回る。

「ぬおっ!? あ、あすか……本気で俺をイカせる気だな……!」

「だって、ひゃずかしんだもん」

荘介のペニスを舐めながら、あすかがそう答えた。まあ、今している行為は恥ずかしいのかという突っ込みもあるが、荘介は行為のもたらず快楽することを優先する。

「びちゅ……ちゅ……ちゅばっ」

あすかの舌が、荘介のカリ首に生き物のように絡みつく。

「うっ、ああ……!」

荘介の背筋にぞわりとした快感が駆け上ったかと思うと、怒張したペニスの先端から熱い飛沫が迸った。

「……んっ、いっぱい

出たあ……」

放出された白濁液が、あすかの顔と胸を淫靡に彩っている。彼女は胸に付着した精液を指ですくい、それをペロリと舐めた。

「うき—————!」

荘介が達したのを見た猿たちが、何やら大盛り上がりの様相を見せる。

「うわ、まったく余韻に浸れねえ……」

「あはは……でも、これでようやく帰れるんだから……」

「うほっ!」

そんなあすかの言葉を遮るように、神官ザルが次なる石版を突きつけてきた。

「って、まだあるのかよっ!」

荘介の突っ込みに、神官ザルがココクと頷く。その顔は「誰もひとつは言っていないだろ?」と、雄弁に物語っていた。

「くそっ、やればいいんだろ……ぶっ!」

荘介は石版の内容を見て、盛大に吹き出してしまふ。それは、男女がセックスしている以外の何物でもない図柄だった。

「ど、どうじゃっか……?」

「……こうなったら、とことんやってやる。あすか、いくぞっ!」

「ええっ? は、あああああん!」

何かが吹っ切れた荘介は、あすかを押し倒すや否や、下着をわずかにずらして、濡れた秘裂にペニスを挿入した。

「ちょ、荘介……いきなり過ぎ……!」

「悪い……けど、もう腰が止まらねえ」

荘介のモノが、ずちゅずちゅとあすかの膣内を掻き回す。猿たちの異様な熱気が伝播したのか、荘介の腰使いはいつになくワイルドで力強いものであった。

(……あれ? なんか、私も……サル

たちに見られてるのに、気持ちいい? ううん、これって……むしろ、見られてるから気持ちいいのかな……?)

あすかの身体を未知の快感が駆け回る。それは、荘介とふたりでエッチしている時には感じたことのない、新たな快楽であった。

「あっ、ああ!! なんか、見られるの……気持ちいい……!!」

淫欲の熱で濡れたあすかの口から、包み隠さぬ本音がもれた。

「あすか、ちょっと激しすぎるぞ……!」

自ら騎乗位になったあすかは、激しく腰を上下させる。先に達した荘介は、そんな彼女の猛攻に耐え切ることができなかった。

「ダメだっ……出るっ……!」

ぶびゅる、びゅる、びゅる!

「私も……イっちゃうよぉ~~~~!」

膣内に精液を注ぎ込まれたあすかは、それが引き金となって自らも達した。弓なりに身体を仰け反らせた彼女は、やがて脱力して横たわる荘介に重なる。

「うき—————!」

ふたりがイットのがそんなに嬉しいのか、猿たちが飛び跳ねて喜びを表現している。

「あはっ、これでイベント終了……かな?」

あすかはニコリと微笑み、荘介と軽いキスを交わすのだった。

【琴音編へ続く】



The 1st Chapter あすか編

EXTRA MEMORIES



## 逆転? S&M

魔法でサドっ気たっぷりになった  
琴音に、荘介もタジタジ!

「旦那様っ?」

「ダーリン!!」

消えた時と同様、カラフルな煙と共に姿を現した後藤荘介に、やおら御堂琴音とエミリー・ウィンスレットが抱きついた。

「大丈夫だった? ケガとかしてない?」

「ホンマに心配したんよぉ……」

「えっと……私の心配はナシかな?」

荘介と一緒に戻ってきたあすかが、おずおずと彼の背後から現れる。

「あ、もちろん心配シテタヨ」

「うん、ソヤネ」

「……気のせいか、まったく心がこもってない気がするんですけど……」

苦笑しながら頬を掻くあすかであった。

「安心しろ。俺もあすかも無事だ。……つか、ドサクサに紛れて俺の性感帯を刺激するのはやめれ」

「あ、バレた?」

豊富な胸を押し付けつつ、荘介の感じやすいところを弄っていたエミリーが、悪戯っぽく小さな舌を出す。

（うっ……エミリーが変なことしたせいで、勃起し始めてるぞ……あっちで、あすかとしたばかりだったのに、俺ってヤツは……。ん……ちょっと待て。あれだけヤツたばかりなのに……いくらなんでも元気づげねえか?）

「そりゃそうだ。あっちの世界の出来事は、現実のおまえらにとっては夢みたいなモンだからな。あっちで何をしようと、こっちの身体は元氣そのものってわけ」

おもむろに荘介の疑問に答えたのは、ソファに座り、これ見よがしにお茶菓子をかじる浅野であった。

「浅野!? おまっ、人の家で勝手にくつろぐなっ! ソレ、俺があとで食べるつもりだったヤツだぞ、ごらぁ!」

「……俺が心を読んだことには、突っ込まないのな。それと、俺はアサノモドキだから」

浅野……もとい、アサノモドキはやれやれと肩を竦ませて嘆息した。

「くっ、モドキのほうか……紛らわしい」

「うちらも最初は戸惑ったけどな……」

「ま、慣れば普通のあさっちとあんまり変わらないけど。むしろ、こっちのほうか芸風が多彩でお得って感じかな?」

顔を見合わせて、ころころと笑う琴音とエミリー。

（浅野……どこまでも悲しいヤツめ）

荘介は、ふたりの浅野に対する認識がよおくわかったような気がした。

「あ、それでな。モドキくんから聞いたんやけど、このゲームって始めたら、最後まで遊ばん

と終わらんらしいよ?」

「……げっ。初耳だぞ、浅野?」

「おう、聞かれなかったからな。あと、俺はアサノモドキな」

妙なところにこだわるアサノモドキ。

「まあ、正確には、誰かひとりがアガリを迎えた時点でゲームは終了するってわけだ。ちなみに、故意にゲームを中断しようとしても無駄だぜ? 本人の意志に関わらず、ゲームは進行しちゃうからな」

「それ、さっきの私みたいに……かな?」

「なるほど、嫌らしい呪いだぜ……」

意に反してサイコロを転がしたあすかを思い出し、荘介は吐き捨てるように呟く。

「一応、注意書きはあったんだけどな」

「んなもん、あったか?」

「ほら、ここ。ラテン語で書いてあるから」

アサノモドキは説明書の中で、荘介もエミリーも読めなかった一文を指し示した。

「普通の学生がラテン語なんて、読めるかぁ~~~~!! 詐欺みたいな手口だな、おい」

「勉強が足りないおまえが悪いな、これは」

「……くっ、浅野の顔で言われると、妙にムカつくぜ」

荘介は、やり場のない怒りを胸に、握った拳をぶるぶると振るわせる。何だか、己の全存在を否定されたかのような心持ちだった。「ともかく、誰かがアガリさえすればいいわけだな?」

「何度も言わせるなって」

「なら、ここはゲームの勝敗については度外視して、誰かがアガルことだけを考えよう」

「昨日の敵は今日の友ってヤツやね」

琴音がにこりと微笑み、ポンと手を叩き合わせた。

「まあ、そんなもんだ。つ〜わけで、足の引っ張り合いや、変な意地の張り合いはナシの方向で頼むぜ」

「ぶ〜……なんかツマンないなぁ」

「そう言うなって、エミリー。次は、もっと健全なゲームで勝負しようぜ」

「ショック! まるで、このゲームが健全じゃないみたいなの口ぶりだな」

「どの口がそれを言うのかしらね?」

さも心外そうに眉をひそめるアサノモドキを見やり、あすかはひよいと肩を竦ませる。

「うん、荘介がそう言うなら別にいいや」

「スマンな。じゃ、次のヤツは……俺か」

荘介は既に自分がサイコロを握っていることに気づき、軽く舌打ちしながらそれをゲーム盤の上に転がした。

「5……か。マスのイベントは「ラッキー! 追加で10マス進む」か。初めて役に立つイベン

トが出たな!」

「ねえ、これって、イベントに進んだ先のマスでも、イベントも起きるの?」

「その通り。実にお得なイベントだぜ」

あすかとアサノモドキのやり取りを横目にしながら、荘介は進んだ先のイベントを読み上げた。

「このマスにふたつ以上のコマが止まった時、魔王の城への扉が開かれる」……って、また飛ばされる系かよ!」

「わお、魔王って響き、とっても魅力的に感じちゃうなぁ」

「んなぶっそうなモンには、お目にかかりたくないぞ、俺は」

エミリーは無邪気に言っているが、猿の神殿を知る荘介にしてみれば、限りなく魔王っぽい何かがあると確信できる辺り、気が気ではなかったりする。

「まあ、同じマスに誰かが止まらん限り、イベントも起きないからそうビビるな。あ、ちょっと台所でコーヒー淹れてくるから」

「助言ありがとう。そして、おまえはもっと物怖じしたほうがいいと思うぞ」

すっかり後藤家になじんでいるアサノモドキに、荘介は皮肉たっぷりと言ってやる。

「いやいや、どうぞ気を遣わずに。俺は出番が来るまでくつろいでるから」

しかし、そんな皮肉はアサノモドキには通用しない。いや、浅野本人もまったく同じ受け答えをするかもしれないが。

「えっと、次はうちかな……とおっ!」

琴音が転がしたサイコロは、3の目を上にして停止した。

「このマスのイベントは「トップのプレイヤーと同じマスにコマを進める」や」

「トップのプレイヤー?」

不意にもれた荘介の呟きに、全員の視線が彼に集中する。

「って、俺か!? 待て、このマスにふたり以上が止まると……!?!」

「さあて、みなさんお待ちかねえ! 魔王の城への扉を開くぜ!!」

「待ってねえよ!!」

「や、やっもうたわぁ〜!?!」

神殿に飛ばされた時と同様、眩い光が荘介たちの視界を覆い尽くした。

☆ ☆ ☆

「こりゃまたずいぶんとファンタジーだな」

気がついた時、荘介はいかにも勇者チックな装備一式を身にまとっていた。

「どうも、この世界の俺は勇者が何かって設定のようだな……」

荘介はブンッと剣を振るってみる。不思議とそれほど重さは感じない。

「おお、なんか格好いいな、俺!」

「ナルっちゃうのはその辺にして、イベントの説明をしてもいいか?」

「モドキか? どこにいるんだよ?」

「今、おまえの家でコーヒー飲んでるから、テレビでちゃちゃっと進行させるぜ」

「……仕事、手え抜くなよ……」

言っても無駄とは思ったが、荘介はとりあえずアサノモドキに突っ込んでおいた。

「今、魔王の城にはお姫様が囚われてる。おまえはお姫様を救出してきた勇者ってわけ。お姫様を城から救出すれば、イベントはクリアだ。燃える展開だろう?」

「おおっ! そりゃ、確かに燃えるな! それで、魔王ってのはどんなヤツだ?」

「意外といいヤツだぜ? 陰湿で、残酷で、キレやすく、ものすげえバイオレンスなのがたまにキズだけだな」

「キズだらけだっ!?」

とりあえず、人格面は最悪のようだ。魔王の看板に偽りなしとあったところだろう。

「あ、そうだ。助けるお姫様ってのは、どんな人だ?」

「いい娘だぜ。お淑やかで、男を立てるタイプで、料理もうまい」

「おお、そりゃいい娘だ。うちの琴音みたいな女の子なんだな」

## 『つか、琴音ちゃん本人だけだな』

「そ、それを先に言えよ〜!!」

荘介は邪悪な威容を誇る、魔王の城に向けて駆け出す。人格最低な魔王の手から、一刻も早く琴音を救出するために。

☆ ☆ ☆

「はあ、はあ……やっつ、魔王の間か」

幾多の戦いのすえ、勇者荘介は最終決戦の舞台に立っている。

「マイケル、ジョゼフ……おまえたちの犠牲のおかげで、俺は暗黒四天王に勝つことができた。そして、暗黒將軍はまさに強敵(とも)と呼ぶに相応しい漢だった……」

遠い眼差しで荘介が呟く。ここに至るまで、なんかいろいろあったらしい。

「おっと、そんなことより、琴音だ、琴音」

そして、その激戦の記憶はあっさりとして荘介の記憶の隅に追いやられた。

「待っていたぞ、勇者よ……」

玉座の背後から、漆黒のマントに身を包んだ巨躯の魔人が姿を現す。その圧倒的な存在感はまさに魔王と呼ぶに相応しいものだ。

「おまえが魔王か!? さあ、姫を……琴音を返してもらおうぞ!!」

見栄を切り、剣を構えた荘介をジロリと睨み、魔王は口元にニヒルな笑みを浮かべる。

「……た、助けて……」

「へ?」

情けない声を残して、魔王の巨躯がゆっくりと崩れ落ちる。どうしていいかわからず、荘介は剣を構えたまま硬直してしまう。

「あははっ! コイツ、口ほどにもないわ」

「こ、琴音!」

倒れた魔王の後ろから、豪華なドレスをまとった琴音が現れた。しかし、いつもの彼女とどこか様子が違う。

「邪魔やわ、このデカブツ!」

挑発的な笑みを浮かべた琴音が、げしげしと魔王の身体を蹴りまくる。

「えっとお……ホントに琴音さん?」

## 「そや、あんたの飼主、琴音さんや☆」

「か、飼主って……初耳ですが!? モドキ、モドキ! これはいったい、どういうことなんだっ!?」

「うっさいな。俺、あすかちゃんとエミリーちゃんと、格ゲーで対戦中なんだけど」

「アナログゲームの精が、TVゲームで遊ぶなっ!? いや、それよりも……琴音の様子がおかしいんだが」

「そりゃ、魔王に人格反転の魔法をかけられたな。ホントは、ここで魔王に操られたお姫様と戦うことになってたんだが……反転後の人格が凶悪すぎて、魔王までやられちゃったみたいだ。あはははっ!」

「わ、笑いごとじゃねえ! どうすりゃ元に戻るんだ?」

「そんなんの簡単だって。イベントをクリアすれば、それで解決だ」

「そっか。琴音を連れて、魔王の城から出ればいいんだな。じゃ、琴音。ここから脱出するぞ」

荘介は琴音に向かって手を差し出す。しかし、琴音はにっこりと微笑んだあと、その手をパシリとはね退けた。

「……なっ!?」

「早漏の分際で、気安く触るな、あほう!」

笑顔のまま、荘介の思考がフリーズする。どうやら、今の琴音の反応は彼の精神の許容量を越えていたようだ。

「心配すんな。今の琴音ちゃん言葉は、本当は正反対の意味なんだからよ」

「——そうか、呪いのせいだ!?」となると、今の台詞は「旦那様、とっても絶倫や☆ もっと、うちの身体にべたべた触って欲しいなあ……みたいな感じか」

どっちにしても、理性というオブラートが剥がれているようで、恥ずかしい内容であるこ

とに代わりはない。自分で言っていて、思わず荘介は赤面してしまう。

「なにニやついとんの? キモいわ、早漏」

「えっと、これは「笑顔も素敵やわ」くらいか……って、なんか今の俺、ものスゲエM男っぽくねえか?」

「ちっ、気づきやがったか……」

裏琴音のサド台詞を、脳内変換して悦びに浸る荘介の姿は、まったくもってM男にしか見えなかった。

「てめっ、このモドキ! ……いや、こいつと遊んでる場合じゃねえか。琴音、早く元の世界に戻ろうぜ? きっと、みんなも心配してるしさ……」

「ん……そやね。魔王の阿呆もしばき倒したし、暇になったんも確かや……じゃ、今度は荘介がうちと遊んでちょうだい☆」

琴音はにんまりと、艶然とした笑みを浮かべる。普段の琴音なら、絶対にしないでであろう表情に、荘介の胸が高鳴りを打つ。

「じゃないと、助けられてあげへんわ」

ツンとそっぽを向く琴音。囚われのお姫様にあるまじき台詞であった。

「わ、わかった。で、遊ぶって……いったいなにをして遊ぶんだ?」

「ふふっ、そんなんの決まってるやないの」

意味ありげに微笑みながら、荘介のもとに歩み寄ってきた琴音は、やおら彼の身体に自身の身体を密着させた。

「こ、琴音……うふおっ!?」

琴音がニヤリと口元を歪めたかと思うと、荘介の股間がぎゅっと締めつけられた。琴音が白魚のような指で、無遠慮に彼の袋を鷲掴みにしてるのだ。

「もちろん、荘介の大好きなことや☆」

くにつくにつ、と琴音が荘介の睾丸を弄んだ。潰してしまわないように、さりとて、愛撫と呼ぶには強すぎる力加減で、巧みに男の大切な部分を苛む。

「こ、琴音……!? もっと、優しく……」

「しゃあないなあ……荘介は堪え性がないもんな。じゃ、ズボンを脱いで横になりや」

琴音は呆れたようにため息を吐き出し、するっと荘介から身を離れた。

「さっさとしい」

「お、おう……」

ちょうど荘介の股間の真正面になるような位置で、琴音が屈み込む。そして、彼女はじつと彼の脱衣を観察し始めた。(……や、やりづれえ)

荘介が、ストリップ嬢という職業にある種の尊敬を抱いたことは言うまでもない。

「なんや、女の子にタマッ弄られて勃起しとんの? あないに苛められて、感じとんの? 荘介ってマゾちゃうの?」

(たぶん、Mっ気があるのは、本当のキミのほうなんだけどねっ!)

荘介は胸中で反論しながらも、ズボン

ぎ捨てて下半身を露出させる。そして、彼は琴音に言われるがまま、床に寝転がった。

「これで、いいのか?」

「……女の子の前で、下半身を晒して、地面に這いつくばるなんて……よおできるな?」

琴音は可哀想なモノを見るような目で、荘介を見下ろし、ため息をもらした。

(いや、キミがやれと言ったんだし!)

心の中でせめてもの反論をする荘介。しかし、琴音の言葉には賛同できてしまう辺り、やるせないというほかない。

「……しかし、よくもまあだらしなくチンポを勃起させたもんだよ。先っちょから涎が垂れてるで」

琴音は淫欲に潤んだ瞳で、振り返った荘介の分身を見つめる。

## 「うちに苛められて、感じたん? よかったん? サイテーやな」

琴音はおもむろに靴を脱ぎ、白いニーソックスをはいたままの足で、荘介のペニスを踏みつけた。

「……うっ!?」

「そんなサイテーな荘介のだらしのないチンポは、うちが足でしたるわ」

肉竿が琴音の足で、下腹部に押し付けられている。琴音は足をぐっと前後に動かすことで、ペニスに刺激を与えていく。

「ちょ……琴音、もう少しソフトに……」

「うっさいな!」

「ふあっ!?」

懇願する荘介に不快そうな顔を見せ、琴音はくりくりとペニスの先端を踏みにじった。

「飼主に命令する犬がどこにおる!」

(お、俺って犬だったのか?)

衝撃の事実(?)に荘介は打ちひしがれる。まあ、実際の意味合いは、先に述べたように正反対なので、あしからず。

「……あ、なんかもお飽きてきたな。そろそろイッてくれん?」

(飽きるの、早っ!?)

どうやら、裏琴音は実物と違い、我慢することを知らない娘さんであるらしい。

「そ、そう言われてもな……」

琴音の足は、確かに緩慢な快楽をペニスに与え続けてはいたが、今すぐにイクには少しばかり刺激が足りなかった。

「しゃあないなあ。とっときのオカズを見せたるから、そのだらしのない肉棒を興奮させまくるんやで」

そう言って、琴音はスカートをたくし上げる。当然、荘介は下着が見えるものと思っていたが——違った。

## 「は、穿いてない!?!」

「そうやで♪」

片手でスカートを持ち上げた琴音は、空い

たほうの手で自らの秘裂を弄る。

「んっ……あっ……」

琴音は荘介を苛めながら、自らも欲情していたようで、すでに彼女の陰部は濡れぼそっていた。琴音の指には、割れ目から滴る透明な液体が絡みついている。

「お……おっ……」

琴音の痴態をまざまざと見せつけられた荘介のペニスが、むくむくと肥大化していく。

「あはっ♪ 大きくなってきたわ。ホンマに荘介はスケベやね☆」

「そんなのを見せつけられたら、誰だって……興奮しちゃうぜ」

「そんなのっていうんは……こんなかな?」

琴音は、くばあっと濡れた秘裂を指先で開いて見せた。充血したピンク色の秘肉が、荘介の眼前に晒される。

「うあ……琴音のアソコ……キレイだ」

「ふふっ、おおきに♪」

琴音は自分の足を押し返そうとする、荘介のペニスを乱暴に愛撫する。垂れ流された先走り汁が、琴音のつま先をぐちぐちと濡らしていた。

「あっ……ダメだ、そろそろ……!」

## 「だらしのないチンポで、お漏らししいや!!」

「……うっ!」

びゅくん、びゅくっ、びゅくっ!!

最後の力を振り絞ったペニスが、琴音の足から逃れ、これまでの逆襲とばかりに白濁液を吹きつけた。

「はあ、はあ……うちの足、荘介の精液でぐちゃぐちゃや」

琴音は精液まみれになったニーソックスを脱ぎ捨てる。

「なんや、うちも気持ちよおなってきたわ……ふふっ、荘介のエロチ●ボ、うちのここに挿れさせたるわ」

琴音は達したばかりの荘介の上に乗し、堅さを失った彼のモノを手でしごき始める。

「さ、うちの気が変わらんうちに、はよ大きくなりやあ……」

琴音はドレスの胸をはだけさせ、小ぶりながらも形の良い胸を露にさせる。

「そんなの、言われるまでも……」

荘介のモノが、ムクムクと力を取り戻していく。そのさまは、まるでペニスそのものが、琴音の膣内に入ることを望んでいるかのようにも見えた。

「あは♪ 大きくなってきたわ」

わずかに腰を浮かせた琴音は、射精したばかりとは思えないほど、雄々しくそそり立ったペニスを、自らの陰部に押し当てる。そして、ゆっくと身体を沈めさせた。

「ん……ああっ!」

すでに十分に濡れていた秘裂は、荘介の肥大化したモノをいともたやすく飲み込んだ。

「うあっ!?!」

ペニスへの心地よい締め付けと、それによる快楽が、荘介の脳髄に、電流のような刺激となって駆け抜けた。

「……はっ、あっ……奥んところ、コツンって……子宮の奥に、チ●ボ当たると……」

自らの奥深くに達した荘介のモノの感触を、琴音は恍惚の表情で堪能していた。しかし、それだけでは満足しきれなくなったのか、彼女は自分から腰を動かした。

「……我慢できん! 荘介のチ●ボ、気持ちよくて……頭が湧けてしまいそうや……!!」

結合部の愛液が泡立ってしまふほど激しく、琴音は己の身体を上下させた。

「……はあ、はあ……琴音のマ●コも温かくて、柔らかくて、最高に気持ちいい……!!」

「そんなの……当たり前や……!」

琴音の小柄な身体が、荘介の腹の上で踊る。彼女が快楽を貪るための行為は、荘介にとって同等の——それ以上の快楽を与える結果となっていた。

「……琴音! 激しすぎて……気持ちよすぎて……俺、もう……!!」

荘介のペニスは、ついさっき達したばかりで敏感になっている。今の琴音の激しい求めには、それほど長い間は耐え切ることができそうもなかった。

「ええよ! 荘介のエッチな汁……あたしの中にいっぱい出してええよ! 今日は特別に許したるから、出してえ……!!」

荘介の精液を欲して、琴音が切なげな表情で懇願した。それに呼応するかのよう、彼女の動きが激しくなり、荘介のペニスに与えられる快楽も倍増する。

「……うあ、そんなに激しく動かれたら……俺……ああっ!」

「ひゃああああああ!!」

甲高い嬌声を上げた琴音の身体が、びくびくと震えた。限界を超えた荘介のペニスは、琴音の膣内に大量の精液を吐き出していた。

「……はあ、はあ……熱いわ、荘介の精液……うちの中にぎょうさん注がれて……子宮がパンパンに膨れとる……」

(……おう、なんか今の琴音の顔……イヤらしくて、キレイで……いいかも)

快楽の余韻に浸る琴音の顔は、この上もない色香を漂わせていた。自らも荒い息を吐きながら、荘介はじっと彼女を見つめ続ける。

「……ん? うちの中で、ビクンって……」

ふと、琴音は膣内に違和感を感じ、怪訝そうに眉をひそませた。

「あ、気持ちよさそうにしてるとこスマン。うちの愚息が目覚ましたみたいだ」

「チ●ボかい!? 息吹き返すの早っ!?!」

荘介は苦笑しながら頬を掻く。琴音の色っぽい顔を見ていたら、それだけで肉棒に堅さが蘇ってしまったのだ。

「ま、俺のはエロチ●ボだからな。じゃ、2ラウンドめといこうぜ」

「ちょ、ちょい待ちっ! うち、さっきのが気持ちよ

ちよすぎて、まだ腰が動かさへん」

見れば、琴音の腰はまだ微かに震えている。絶頂の名残が、いまだ爛り続けているのだろう。

「じゃ、今度は俺の番かな？」

荘介は裏琴音の狼狽するさまを見て、意地の悪い笑みを浮かべた。

こっちの世界では、終始、琴音に主導権を握られっぱなしだったが、ようやく荘介にも逆襲の機会が訪れたのだ。

「よ……と」

「犬の分際で、勝手に体位を変えて……！」

荘介は結合を維持したまま、琴音の身体を床に寝転がらせ、正常位の体勢となる。

「ははっ、犬だから人の言葉でそんなことを言われても、さっぱりわからねえ。じゃ、いくぜっ」

「ひゃああっ!!」

荘介はすっかり怒張したペニスを、ズンッと勢いよく膣奥に突き込んだ。さっきとは違い、荘介の意志による深い挿入は、琴音にも別種の快楽を与えたようだった。

「そういや、こっちの琴音は、激しいのが好きだったっけな」

「ふあっ!？」

荘介は、琴音の子宮を突き破らばかりに、激しく腰を打ちつけた。肉のぶつかり合う音が、バンバンと響き渡る。

「ん……すご……ええわっ!!」

少し乱暴なくらいが、こちらの琴音にはちょうどいいようだった。彼女の顔には、恍惚とした悦びの色が浮かんでいる。

「どうだ? やっぱ、責められるのも捨て難いだろ?」

「そ、そんな……うちは……はあっ!」

快楽に身を悶えさせながら、琴音はイヤイヤとかぶりを振る。

Sっ気たっぷりの裏琴音にも、多少はMの部分も残っているらしく、彼女は明らかに責められることに快感を見出していた。

「違うのか? 本当に?」

「う……うううう……」

裏琴音は目の端に涙を滲ませながら、小さな声で唸った。どうやら、荘介に屈服してしまうのは、Dの裏琴音には耐えられないことらしい。

(ちょっと苛めすぎたかな? これじゃ、俺のほうがSみたいだな……)

胸中でやりすぎてしまったことを反省した荘介は、彼女の身体を持ち上げ、正面から抱き合うような体勢に移行した。

「Sのマネはこれで終わりだ。エッチはやっぱり、心も身体も気持ちよくなけりゃな」

「あ……はあ……ああ……」

荘介はさっきまでとは違い、優しく、ゆっくりとした動きで琴音の膣を突き上げる。

「なんやの……こんな、モタついた動きなのに……なんて、気持ちええの……!？」

「そりゃ、俺が琴音を気持ちよくイカせようとしてるからさ」

琴音の胸に顔を埋めさせ、荘介はピンク色の突起を舌の先で弄んだ。

「やっ……乳首ええ……先っちょ、もっと弄ってえ……!」

痺れるような快感が背筋を突き抜け、琴音は弓なりに背を反らせてビクビクと震えた。

「あ、ダメ……うち……イッて……!!」

昂ぶった感情を抑えきれず、琴音は言葉にならない声を盛大に発した。

**「んあああああああ  
あっ!!」**

「……うっ!？」

絶頂に上りつめた琴音の膣がきゅうっと収縮し、荘介のペニスをねじ切らんばかりに締めつける。

びゅる、びゅるっ、びゅるんっ!!

訪れた快楽に耐え切ることができず、荘介は再び琴音の膣内を精液で満たしていた。

「はあ、はあ……お腹いっぱいや……精液、も入らん……」

荘介は琴音の膣内からペニスを引き抜く。彼女の中に大量に吐き出された精液が、ドロリと秘裂の外に漏れ落ちた。

「我ながら、よくもまあこんなに——」

(——いや、もしかしたら、SとMの倒錯したシチュエーションが、俺をこんなに興奮させちまったのか?)

ふと、荘介はイヤな可能性に思いが至る。(まあ、琴音みたいな魅力的に女の子に、あんな風に迫られたら、健全な男子なら誰でもこのくらいしちゃうよなっ!)

こっそりと、自分はノーマルであると、自己弁護をしておく荘介であった。

「……荘介、こっち向いて……」

「へ?」

琴音のほうを向いた荘介は、いきなり彼女に唇を奪われた。唇を離れた琴音は、不意を突かれて呆気にとられた荘介に、ニコリと微笑みかける。

「悪い魔法は、王子——あ、この場合は勇者か——のキスで解けるんや。元に戻ったうちのことも、かわいがってえな……」

刹那、荘介の視界が眩い光に包まれる。そして、彼の意識は異世界から乖離した。

☆ ☆ ☆

「お、元の世界だ。琴音、大丈夫か?」

気がつけば、荘介は琴音と共に、自宅のリビングに佇んでいた。

「荘介、琴音!? よかった……お帰り!!」

エミリーとアサノモドキがTVゲームで対戦しているのを観戦していたあすかが、ふたりの帰還に気づき、満面の笑みを浮かべる。

を浮かべる。

「おう、ただいま。つか、ホントにTVゲームやってんのな、モドキは」

「あははっ、まあね。それより、向こうの世界はどうだったの?」

「トンでもないハブニングもあったけど、燃える展開もあって、なかなか楽しめたぞ。なあ、琴音? ……琴音?」

ここに至り、荘介は琴音の肩が小刻みに震えていることに気づいた。

「……うち、旦那様にあんなことや、こんなことを……」

「あ、もしかして……魔法で人格反転してた時のことって……全部覚えてる?」

琴音はうつむいたまま、コクリと頷いた。そして、危険に据わった目でこう叫んだ。

**「切腹せな、ご先祖様に申しがたたん!!」**

「ちょ、待って!?」

「旦那様、後生やあ~~~~!!」

刃物を求め、台所に駆け出そうとした琴音を、荘介がはがし締めにする。

「武士の情けを~~~~っ!!」

結局、琴音が落ち着くまで、ゲームは中断を余儀なくされるのであった。

(エミリー編へ続く)



The 2nd Chapter **琴音編**

EXTRA MEMORIES



## コスミックラブ

エイリアンに征服された世界。  
エッチは地球を救えるのか!?

生命の息吹が枯渇した大地に、今にも崩れ落ちそうなコンクリートの塊が、まるで墓碑のように突き立っている。

いくつもの、いくつもの——乱立する巨大なコンクリートは、かつて「街」と呼ばれたモノの名残で、今や人類が繁栄した証を大地に刻む、数少ない場所となっていた。

「荘介! そっちにタコ足が行ったよ!」

廃ビルのベランダから、後方の監視をしていたエミリー・ウインスレットが、腕をぶんぶんと振りながら、後藤荘介に背後から迫る危機を伝えた。

「おう! 数はどれくらいだ?」

「えっと……2体っ!」

「それなら、今の装備でもいけそうだな……」

「よし、このまま迎え撃つぞ!」

「あはっ! そうこなくっちゃ!」

エミリーは荒廃した風景に映える明るい笑みを浮かべて、荘介にくっつき親指を立てて見せた。

ガシャン! ガシャン! ガシャン!

甲高い機械音が、規則正しいリズムで聞こえてきた。

「……近い」

ひび割れたアスファルトが、まるで地震でも起きているかのように、グラグラと揺れ始める。そして、それは時間と共に大きくなっているようだった。

ガガガガッ!

荘介の視線の先で、廃ビルの一角が崩れ落ちる。舞い上がるコンクリートの粉塵。その中から、円盤に幾つもの脚が生えた巨大な戦闘機械が姿を現した。

それは、この星の侵略に訪れたエイリアンの多脚戦車——通称、タコ足(命名:エミリー☆)であった。

円盤に備えられた砲塔が、本体よりもはるかに小さな荘介に狙いを定める。

「遅せえ!」

タコ足が接近するより前に、ロケットランチャーを構えていた荘介は、敵の光線が自らを蒸発させるよりも早く、そのトリガーを引いた。

バシュ!

放たれた成形炸薬弾が、円盤と多脚の接合部を撃ち貫く。

「そこ、おまえらの弱点なんだよな?」

ニヤリと不敵に笑う荘介。直立が可能になったタコ足が、ゆっくりと崩れ落ちる。

「あばよ」

荘介は集束手榴弾を、ちょうど円盤の下に位置するように放り投げた。刹那の後、円盤は先の損傷部から内側を灼かれ、完全に

沈黙することになった。

「……!?!」

上空から迫る影に気づいた荘介は、とっさに左横に飛び退いた。

ガシャン!

今まで荘介がいた位置に、空高く跳躍していた、もう一体のタコ足が着地した。

「くそっ!」

地面に転がった体勢のまま、荘介はタコ足をマシンガンで狙い撃つ。しかし、それは厚い装甲に阻まれて有効打にはならない。

「ダーリン!? 今、助けるからっ!」

ドゴンッ!

脚部の関節を穿たれたタコ足の体勢が崩れる。それは、廃ビルのベランダに待機していたエミリーによる、対戦車ライフルでの狙撃であった。

「どおだ!!」

ドゴンッ! ドゴンッ! ドゴンッ!

エミリーは続けざまに対戦車ライフルで、タコ足の関節を破壊していく。やがて、バランスを崩したタコ足は、廃ビル群のひとつに、折り重なるようにして倒れていった。

「やたっ!」

喜色を滲えたエミリーは、小さく拳を掲げてガッツポーズを取る。

「さすがエミリーだけ。射撃の腕は、超一流だな……」

荘介はサメのような笑みを浮かべて、慣れた手つきで空になったマシンガンの弾倉を交換した。

俺の名は後藤荘介。

突如、謎のエイリアンに侵略されたこの星で、いまだ反抗を続けるレジスタンスのひとりだ。

今日は、たまたま勝利を得ることができたが、こんなものは大勢には何ら影響しない。

日を追うごとに仲間たちの数は減り、ただ無為な消耗を続ける毎日だ。まったく、夢も希望もありはしねえ。

まあ、幼なじみにして最高の相棒、エミリーが側にいるのがせめてもの救いか……。

## 「って、違うだろ!?!」

クールにモノローグを語っていた荘介が、ようやく我に返った。

## 「この話はさ、幼なじみと甘〜くエッチに過

## ごす話だろうがっ!

やおら虚空に向かって叫ぶ荘介。誰に向けての言葉なのかは、きっと本人もわかっていないに違いない。

「どしたも、荘介? 魔女の婆さんの呪いで何かあった?」

「違うっ! つか、エミリーもそんなハードな世界から、甘くてエッチなこっちの世界に帰って来っ〜い!!」

「おいおい、あんまり騒いでると敵に見つかるぜ?」

「てめ、モドキ!?!」

いつの間にか、アサノモドキが荘介のすぐ側に転がる瓦礫の上に腰を下ろしている。

「それとも、新手的Mプレイ?」

「そっち系のネタはもういい!」

一応、性癖はノーマルということで通しておきたい荘介であった。

「まあ、こっちの世界にも慣れてきたようで、俺は安心したぜ。おまえらなら、立派に新世界のアダムとイブになれるぞ」

「あはっ! 変なこと言わないでよ、あさち。……ね、ダーリン、子供は何人がいいかな? いっぱい欲しいよね?」

「だから、適応すんなってば! ……まあ、子供は欲しいかもしれないけど……」

エミリーには聞こえないよう、荘介は言葉の後半をごによごによと濁した。

「へ? なんか言った?」

「い、いや!? なんでもっ!」

「いやはや、お熱いねえ……あと、俺はアサノモドキな」

ふたりの甘酸っぱいやり取りを見て、やれやれと肩を竦ませるアサノモドキであった。

☆ ☆ ☆

荘介とエミリーが、エイリアンに侵略された異世界に飛ばされる「数分前」——異世界と現実世界では、時間の流れが異なる——後藤家のリビングでは、やはりお約束の事態が発生していた……いろんな意味で。

「あすか……もお堪忍して……」

御堂琴音に後ろから抱きついた涼風あすかが、彼女の耳を甘噛みしている。事情を知らない人間が見れば、ふたりの関係を誤解してしまうこと確実だ。

「ご、ごめん……身体が、勝手に……」

今、あすかのコマが停止しているマスのイベントは「最下位のプレイヤー(この場合は琴音)の耳を甘噛みする」であった。

行為そのものは己の意志に反していたが、

あすかの肉体は、琴音を感じさせるための最良の手段を適時選択しているようであった。「ひゃんっ! はあ、はあ……なんや、変な気分になってまう……」

あすかに強く耳たぶを噛まれた琴音が、切なげな声で鳴いた。

「ちょ、琴音……変な声を出さないでよ……こっちまで、変な気分になってくるじゃないの……」

赤面したあすかが、陶然とした顔を見せる琴音から目を逸らそうとする。しかし、それでも彼女の行為が停止するわけではない。「だって、あすか……ものすごくヤらしいんやもん……ふあっ!」

「や、ヤらしいのは、あのセクハラゲームだってば……!?!」

あすかは懸命に自らの潔白を訴えるが、行為を継続したままでは説得力は皆無に等しい。

「ふたりともスゴッ……ね、荘介もそう思うでしょ?」

興味津々といった様子のエミリーが、くいくいと荘介のシャツを引っ張る。さすがに彼女の頬も朱に染まっているが、羞恥よりも好奇心が勝っている状況なのだろう。

「げ、ゲームの呪いのせいなんだから、仕方ないだろ。ほら、あんまり見るなって」

「ええ……?」

エミリーは不満げな声を出していたが、荘介は半ば強引に、彼女の顔を明後日の方角に向かせた。

「ふたりに悪いだろ、なっ」

(……とか言いつつも、ちょっとだけ……)

自分だけは、チラチラとふたりの行為をのぞき見る荘介。やっぱり、彼も年頃の多感な男の子であった。

「はあ、はあ……あっ?」

あすかは自分の身体が、思い通りに動くことに気づいた。どうやら、イベントの継続時間は終了したようだ。

「ふえ……もう終わりなん、あすか?」

「うん、そうみたい」

何気に琴音は「もう」とか言っていたが、藪を突いて蛇を出したくないあすかは、そこには突っ込まずに放置しておいた。

「……残念」

「なんですってえ!?!」

ボツリともれた荘介の本音。あすかは、まるで肉食獣のような眼で彼を睨みつけた。

「い、いや、何でもないぞっ!! お、次は俺だな。やっぱり、サイコロは自分の意志で振らないとな〜」

ずっとほけた声を出しながら、荘介はサイコロを転がす。結果は5——コマが停止した先のイベントは「このマスにふたつ以上のコマが止まった時、荒廃した近未来への扉が開かれる」だった。

「……む。久しぶりに異世界イベントが来た

か……」

「荘介って、それ系のイベント好きだよな〜。もしかして、わざと踏んでる?」

「んな器用なマネができれば、もっと有意義に活用してるって。まあ、今日はリアルラックが悪すぎるだけだ」

レアなイベントをことごとく踏んでいるのだから、ある意味、とても運がいいと言えなくもないのだが。

「ま、さっきモドキのヤツも言ってたけど、もうひとり来ない限り、イベントは起きねえし。そう何度もあんなハードでおいしいイベントが起きてたまるかよ」

「おいしい?」

「あ、こっちの話だから」

ちなみに、荘介にありがたい助言をしてくれたアサノモドキは、ソファの上で昼寝の真ん中だ。基本的に特殊なイベントが起きない限り、彼は暇であるらしい。

「それはそうと、次は琴音の番だけど……大丈夫か?」

「……うん、まあ大丈夫や」

いまだあすかに責められた余韻が残っている琴音は、とろんとした瞳のまま、サイコロを転がした。

「いや、あんまり大丈夫そうには見えないんだが……」

せめて琴音が楽なイベントのマスに止まることを願う荘介だが、こればかりはまるっきり運に左右されるため、彼にはいかんともし難い。

「4か……ふえ、1回休みやあ……」

「よしっ!」

琴音はしょんぼりと肩を落とすが、荘介はそんな彼女とは正反対に、実に嬉しげな声を発していた。

「なんで、喜ぶん??」

「このゲームで1回休みになるっていうことは、変なイベントに振り回されることなく、本当に次の次の手番まで休めるイベントっていうことだからな」

「……あっ」

荘介の言わんとすることを察した琴音は、ボンと両の手を叩き合せた。そんな彼女に、エミリーがニコリと微笑みかける。

「そうだよ、琴音。誰かひとりアガっちゃえば、このゲームも終わりなんだから、1回休みはむしろラッキーって思わなきゃ!」

「ま、俺たちが変なイベントを踏んだら、その限りじゃねえけど」

「そっかあ……もうこのゲームは、チーム戦になってるんやもんね」

「だから、今は私たちに任せて、琴音は少し休んでいなよ」

自分の手番が回ってきたエミリーが、サイコロを放り投げた。

「んと、2だね……イベントは「好感度が最も高いプレイヤーと同じマスに止まる」だって、

好感度って、なんだろ??」

「ゲームしてる面子の中で、誰のことが一番好きかってことだよ、エミリーちゃん」

「あ、そうなんだあ」

アサノモドキの言葉を聞いたエミリーは、迷うことなく荘介のほうを向いた。

「えっと、エミリーさん? 俺のマス、もうひとり止まっちゃうと、異世界に飛ばされちゃうんですけど……」

「そうだっけ?」

「うん、そうそう。だから、ここは嘘でもいいからあすかが、琴音のところにな……」

可能な限り、異世界でのハードなイベントは避けたいのが、荘介の心情だった。

「わかったよ、荘介」

「おう、スマンな」

エミリーの言葉に、荘介はホッと胸を撫で下ろす。

**「でも、わたしが好きなのはやっぱりダーリンだからっ♪」**

「ちょ、待てえ~~~~!?!」

前言を撤回して、やおらエミリーが荘介の身体に抱きついた。それを彼女の回答と判断した魔法のゲームは、エミリーのコマを荘介と同じマスに移動させる。

「じゃ、荒廃した近未来への扉を開くぜ。このイベントは超キツイから、がんばってくれ! アディオス、アミーゴ!!」

例によって、荘介とエミリーの視界が眩い光に包まれる。異世界に飛ばされる前兆だ。

「大丈夫だよ、ダーリン」

「エミリー、なにか考えがあるのか?」

**「愛さえあれば、きっと何とかなるよ☆」**

それは、行き当たりばったりと同義の言葉であった。

「いやいやいや! 人は愛だけじゃ、生きていけないんですか?!!」

こうして、ふたりは異世界に飛ばされたわけなのだった。

☆ ☆ ☆

「初めはどうなることかと思ったが、こっちの世界にも何とか順応しちまったな……」

日が完全に沈んだ後、倒壊したビルの瓦礫が散乱する街中で、荘介とエミリーは焚き火を囲んでいた。

「まあ、このイベントの終了条件「世界を救う」ってのが、いまだによくわからないのが悩みの種ではあるけどな」

荘介は面倒臭そうに息を吐き出す。アサ

ノモドキが告げた条件は、本当にその一言だけで、具体的な解決策が提示されることはなかったのだ。

「エイリアンを全部倒せばいいんじゃないのかな？」

エミリーはあっけらかんとそう言うが、荘介はゆっくりとかぶりを振る。

「いくら俺たちがモドキの魔法でパワーアップしてるからって、連中を完全に駆逐できるのはいつになるかわからんぞ」

「……となると、それ以外の選択肢がこのイベントには用意されてるってことだよな」

難しい顔をしながら、エミリーはやおらシャツの裾に手をかけて、それを脱ぎ始める。

「問題は、その方法なんだけど……って、ここでどうして服を脱ぎますか!？」

「え？ 着替えだよ？ 昼間の戦闘で、汗だくなっちゃったから」

「せめて、ひと声かけるとかしてくれ!!」

妙に気恥ずかしくなった荘介は、赤面してエミリーから視線を逸らす。

「ひょっとして照れてる？ 子供の頃から何度も、わたしの胸を見てくせに」

「子供の時はノーカン！ それに、照れてるわけじゃ……」

やはり、エミリーの裸が気になるのか、そろりと彼女の着替えをのぞき見る荘介。ノーブラだった彼女が脱いだシャツの下からは、ダイレクトに豊かな胸が露になっていた。

「あ、見てる」

「ぶっ!!」

あっさりとのぞきがバレてしまい、荘介は思わず吹き出してしまう。

「ね、わたしの胸……気になる？」

エミリーの顔に切なげな色が宿る。彼女が自分に何かを期待しているように感じ、荘介は思わず息を飲み込んだ。

「気にならないと言えば……嘘になる。むしろ、めっちゃ気になりマス」

「あはっ♪ 正直でよろしい。……じゃ、触ってみる？」

「い、いいのか？」

「でも、胸だけじゃ……イヤかな。ダーリンのこと、身体全体で感じたいから……」

どちらから申し合わせたわけでもなく、荘介とエミリーは、自然と唇を重ねていた。

「……あっ、ふぁ……」

荘介の手が、優しくエミリーの胸を揉みしだく。柔らかな彼女の胸は、荘介の手の動きに従って、千変の移ろいを見せる。

「ダーリン、下も……私、疼いてきちゃって……もう……」

「ははっ、エミリーは感じやすいな。そう急かすなって」

荘介は迷彩柄のズボンを脱がし、エミリーの下着を露にさせる。

「濡れてるな……実は結構、期待してた？」

股間の部分が湿り気を帯び、そこだけが他と色合いが変わっている。

「ダーリンとふたりっきりなのを意識したら、

急にエッチな気分になってきちゃって……」

「しょうがないヤツだな」

荘介はエミリーの下着の中に、右手を差し入れ、濡れぼそった彼女の陰部をくちゅくちゅと掻き回した。

「……あっ、そこ……いい……ふう……」

エミリーが陶然とした息をもらす。荘介は彼女に更なる快感を与えるべく、秘裂の中に指を入れようとした。

カツン。

いきなり、荘介の後頭部に堅いモノが押し当てられた。

「痛っ……モドキか？ まったく、タイミングの悪い時に……」

不機嫌そうな顔で振り向く荘介。しかし、そこにいたのはアサノモドキではなく、銀色の防護服に身を包んだ、エイリアンの一団であった。

## 『我々と共に来てもらおう』

荘介の顔面に光線銃の銃口を突きつけているエイリアンが、まるで機械音声のような無機質な声でそう言った。

「は、はい……」

これ以上もないほど無防備になっていた荘介とエミリーは、あっさりとエイリアンに捕縛されてしまった。

(そういや、ホラー映画とかだと、いちやついてるカップルってよく死ぬよな……)

そんな考えが抱けるだけ、まだまだ余裕のある荘介であった。

☆ ☆ ☆

「俺たちをどうするつもりだ？」

「我々のリーダーがお会いになる」

エイリアンの母船に連れていかれた荘介たちは、彼らのリーダーがいるという部屋に案内されていた。

「ここだ、入れ」

銀色の扉が音もなく開く。気が遠くなってしまふほど、広大で真っ白な空間の中に、人間の倍ほどの大きさもある異形の存在——人型の甲殻類と言え、その姿を幾分か正確に伝えられるだろうか——の姿があった。

「おまえが、エイリアンの親玉か」

「その表現は的確ではないが、キミたちの文明では、そのように表現することも誤りではないモノである」

「荘介！ ち、地球語を話したよ!!」

「翻訳機を用いている。それと、翻訳対象は日本語であるのだが」

微妙な沈黙が辺りを支配する。

「……エイリアンに突っ込まれるとは、器用なマネを……エミリー・ウィンスレット、恐ろしい子!!」

「えへへ♪ 褒められちゃった」

絶体絶命の状況であるにも関わらず、わりと危機感のない、荘介とエミリーであった。

「話を進めてもいいかな？」

「あ、どうぞどうぞ」

荘介に促されてから、ようやく話の続きを切り出すエイリアン・リーダー。ふたりのかけ合いを見守る辺り、なかなか律儀な性格をしているのかもしれない。

「我々は地球を侵略するにあたり、様々な概念を研究し、理解しようと試みた。しかし、いまだにどうしてもわからないモノもある」

「わからない……モノ？」

「そう、それは愛という感情だ。我々には、それに類する感情が存在しない」

エミリーが不思議そうに小首を傾げ、リーダーに問いかける。

「じゃ、あなたたちは恋愛をしないの？」

「概念自体が存在しない。我らの増殖は、細胞の複製によって行われる」

「そっか。種としての在り方が、俺たちとは違うってわけだな」

「その通りだ。そこで、私はキミたちに尋ねたい。愛とはいかなるものか？」

「いきなり、んなこと聞かれても……」

返答に窮した荘介は、にわかには答えることができず、沈黙してしまう。

「ダーリン、私にいい考えがあるの」

「今度は、本当だろうか？」

この手のエミリーの言葉は、前例があるだけに、いまいち信じ切れない荘介である。

## 「うん！ わたしたちのラブラブなエッチを見せて、エイリアンに愛を学んでもらおう♪」

「ま、マジか？」

「ほう、それは興味深いな」

瞳をキラキラと輝かせるエミリーに、旺盛な知識欲をたぎらせるエイリアン——この時点で、荘介からエミリーの提案を断るという選択肢は消えていた。

「えっと、地球人には男と女がいるってのはわかるよな？」

「雄と雌だな」

「ニュアンスは違うけど……そう、それだ」

数分後、エイリアン・リーダーの前で全裸となった荘介とエミリーは、エイリアンを対象にした性教育(?)を開始していた。

「愛っていうのは、いろんなモノがあるけど、代表的なヤツは、男女の間に発生するもんなんだ。それで、その……フォローを頼む」

早々に言葉に詰まった荘介は、エミリーに助け舟を求める。

「オッケー！ じゃ、これからわたしたちが愛のカタチを実践してみせるね」

明るく答えたエミリーは、やおら荘介のべ

ニスをぎゅっと握り、それを勃起させるためにしごき始めた。

「って、いきなりエッチを見せんのかよ!？」

「だって、日本じゃ百聞は一見にしかずって言うんでしょ」

「……珍しく正論に聞こえるな」

「早く、さっきの続きもしたいしね」

ペロリと舌を出すエミリー。どうやら、そっちのほうが本命であるらしい。

「キミたち。神経系の働きが、かなり活性化してるな。それはなぜだ？」

「たぶん……感じるからじゃないかな？」

エミリーの手で、すっかり怒張したペニスを眺め、荘介はそう答えた。

「じゃ、今度は俺がエミリーを気持ちよくさせてあげるよ」

荘介は己の掌に余るサイズのエミリーの胸に手を這わせ、それをゆっくりと揉み解す。中断した先の行為の分まで、荘介は丹念に彼女の胸を愛撫する。

「……はぁ、はぁ……ダーリン……」

エミリーは空いている手で、荘介のペニスをしごき続ける。快楽が継続していることもあり、荘介の愛撫も俄然、熱を帯びていく。「さっきはこっちのほう、中途半端で終わってたよな……」

くちゅ。

「ひぁ! あっ! うん、そこ……さっきから切ないままだから、もっと強く……!」

秘裂に挿し入れられた荘介の指が、エミリーの内側を掻き回す。

「こうか？」

「ふぁ! あっ! もっとお……!!」

エミリーの足がガクガクと震え、彼女は立っていらなくなる。荘介はそんな彼女を支えたまま、ゆっくりと床に寝転がった。

「キミたちの肉体の反応は、我々の予測範囲内のモノである。しかし……その神経系の異様な昂ぶりはなんだ? この数値は、我々の予測をはるかに上回るものだ」

「好きな人同士がエッチするとね、気持ちの良さもゴンとレベルアップするんだよ☆」

「理解不能な論理だ……」

エイリアンは、エミリーの言葉に少なからぬ衝撃を受けている様子であった。

「エミリー、そろそろ挿れるぞ。このままじゃ、おまえの手でイッチまうぜ」

「うん、来て……」

正常位の体勢になった荘介は、エミリーの中に己の分身を埋没させていく。既に充分に濡れていたエミリーの秘裂は、あっさり彼のモノを飲み込んでくれた。

**「ああっ! ふあっ!」**

エミリーの全身が挿入の快感に震えた。

「それが交尾……キミたちの生殖手段か」

「間違っではないけど……それは、ちょっと違うかもな」

「どういう意味だ?」

エミリーの膣内を突き上げながら、荘介はエイリアンの問いに答える。

「これは、単なる生殖手段なんかじゃない。お互いの愛情を確認し合うための……崇高な儀式だ!」

「……なるほど。興味深い答えだ」

「お、おうっ!」

ノリで言ってしまった台詞に、真面目に対応されてしまい、凄まじく照れくさい思いをしよう荘介であった。

「はぁ、はぁ……ダーリン、わたしのほうも……見て……!!」

「おっと、スマンな」

エイリアンに意識が向いていたため、腰の動きが疎かになっていた荘介を、咎めるような眼差しで見るエミリー。

「じゃ、お詫びにこんなのはどうだ?」

荘介は腰に横の動きも加え、エミリーの膣内を掻き回す。

「あっ! わたしの中で……ペニスがぐちゅぐちゅって……ダメ……気持ちよすぎて……腰が止まなくなっちゃうよぉ～!!」

貪欲に快楽を求めて、エミリーは自らも腰を振り始める。

「ダーリン! わたし、もう……」

「うっ! そんなに激しく動かれたら、俺もすぐにイッチまう……」

あまりの快感に、荘介の目が霞んでいく。やがて、エミリーの膣がきゅうっと収縮した時、彼は大量の精を膣内に放っていた。

**「うああああああ!」**

**「イッチャウウウウ!」**

**「ううう!」**

ドクン、ドクッ、ドクン!

荘介のペニスが脈打っている。絶頂を迎えたエミリーの陰部が、ひくひくと震える。

「ダーリン……」

「……エミリー」

絶頂の余韻に浸りながら、ふたりは互いの唇を貪り合う。

「理解不能だ……」

エイリアン・リーダーは、再び先と同じ言葉を呟っていた。

☆ ☆ ☆

「……行っちゃったね」

廃ビルの上で、荘介とエミリーは地球から撤退していくエイリアンの宇宙船団を眺めていた。

「「愛という概念が理解できるまで、侵略は無期限の延期とする」……か。その理屈のほうが、俺はよくわからん」

「案外、いい人(?)だったよね。あのリーダーさん。帰る前に、私たちを解放してくれたし」

「……かもな」

言葉少なに答え、荘介は微笑した。

「なァ、連中……愛を理解したら、また地球に来るのかな?」

「その時はきっと、お互いに仲良くできるはずだよ、きっと」

「……だといいな」

架空の世界のこととはいえ、そう願わずにはいられない荘介であった。

やがて船団の姿が見えなくなり、荘介とエミリーの身体がキラキラとした光の粒子に包み込まれる。

「これでイベントはクリアー。こっちも、帰還の時間みたいだね」

「……今回ばかりは、エミリーの言った通りだったな」

「えっ?」

「愛さえあれば、何とかなるってヤツさ」

エミリーはきょとんとした顔を見せたかと思うと、やがて満面の笑みを浮かべて荘介に抱きつく。

「うんっ!」

そして、ふたりは睦まじく抱き合った姿のまま、元の世界に帰還するのだった。

〔ハーレム編へ続く〕



The 3rd Chapter エミリー編

EXTRA MEMORIES



## 荒野の性戦

ヒロインは荘介？  
最初で最後の逆ハーレムの始まりだ！

西部劇に登場するような荒れた雰囲気  
の酒場に、ガラの悪い男たちが集結している。

ここは、刹那の享楽を得るために、暴力を  
行使する輩——悪漢たちの根城であった。

「まったく、ついてねぇよな。なんで、男な  
んかを人質にしなきゃならねぇんだ」

「真っ先に来たヤツが、人質になる……それ  
が、この世界のルールなんだから仕方ねぇ」

強面の悪漢たちが、縄で縛り上げた人質  
の少年をじろりと睨みつける。

「あの、その……俺も困ってまして……ゴメ  
ンナサイです」

人質の少年ごと、後藤荘介は期待に添え  
なかったことを悪漢たちに謝しておく。

(アガリの直前で、嫌な世界に飛ばされちま  
ったな……これ、誰かが助けに来るまで、  
捕まったままなのか、俺?)

この世界ではヒロイン(性別は男だが)役  
である荘介は、悪漢たちに手も足も出ない  
……そういう、ルールに縛られているのだ。  
(ううっ、情けなくて、泣けてくるぜ……)

悪漢たちではないが、こういう役どころは  
かわいい女の子に優先的に回してほしいと  
願う荘介であった。

「コイツ、いらぬなら、おでにけれ。結構  
……好み、なんだな」

「ああ、おまえ……そっちの趣味だったけ。  
たっぷりケツの穴をかわいがってやんな」

悪漢たちの間で、非常に不穏なやり取り  
が聞こえた。声の方向をそっと窺えば、い  
かつい大男ともろに目が合ってしまう。

「……ぼっ」

「いやいやっ! そこ、頬を赤らめるとこ、  
違うだろ!」

「大丈夫、痛いのは……初めのうちだけなん  
だな」

「男の子のお尻は、そんなモノを受け入れる  
ようにはできてないんデス!」

大男は舌なめずりをしながら、荘介のス  
ポンに手をかける。そして、彼の引き締ま  
ったでん部が露になった。

「お、おで……もう」

荒い息を吐きながら、大男は股間がイヤ  
な感じに盛り上がった、己のスポンのベル  
トに手をかける。

### 「そこまでよっ!」

バンッ! と、酒場の扉が開け放たれる。  
入り口には、陽光を背にした3人の少女た  
ちの姿が存在していた。

「か弱い男の子をさらう、暴虐無尽な振る舞

い……断じて、許し難いわ!」

先頭に立ち、凜とした声で見栄を切る  
のは、西部劇の保安官といった風体の涼風  
あすかだった。彼女は、構えた拳銃の銃口  
を悪漢たちに向けてる。

「そんなひどいヤツらは、わたしたちがギタ  
ギタにしてあげるんだからっ!」

続いて、カウボーイ姿のエミリー・ウィン  
スレットが、ホルスターから引き抜いた二丁  
拳銃を、器用に両手に構えた。

「これも、渡世の義理……往生せいや」

トリを務めるのは、西部劇の世界である  
にも関わらず、古風な渡世人のような格好  
をした御堂琴音であった。

琴音は鋭い眼差しで悪漢たちを睨み、手  
にした長ドスをスルリと引き放つ。

「あすか! エミリー! 琴音!」

荘介の顔に、安堵の色が浮かぶ。彼の窮  
地に登場したのは、頼れる3人の幼なじみ  
たちであったのだ。

「さあ、荘介。私たちが来たからには……も  
……う……」

大男に今にも犯されそうな荘介の姿を目  
の当たりにしたあすかが、力強い笑みを浮  
かべたまま、フリーズしてしまう。

「そ、荘介! わたしたちというものがあ  
りながら、そんな男と……ヒドイよっ!」

「えと、その……うちは旦那様に男色の気が  
あっても、気にせんから……」

一方、エミリーと琴音は、盛大な勘違い  
をしているようだ。

「ちょ、おまえらっ! 変な誤解をしてない  
で、俺を助けて……!?!」

そろそろ本気で助けてもらわないと、お  
尻の処女が散ってしまいそうだ。

「な、な、な……」

うつむいたあすかの肩が、小刻みに震え  
始める。辺りに不穏な空気が漂い出した。

## 「なにやってんだ、お まえはあ~~~~!!」

「って、こっちかよっ!?!」

ガツン!

あすかが投げつけた拳銃が、荘介の顔面  
にヒツする。

「い、痛ひ……」

拳銃がめり込み、カートゥーンのキャラク  
ターのように顔面が陥没する荘介。そして、  
彼の意識はくらりと遠のいていくのだった。

☆ ☆ ☆

びちゃ、びちゃ、ちゅば……。

(……なんだ、この音?)

どこからか、粘ついた水音が聞こえる。

「……あ! 今、びくって動いたよ!」

(これ、エミリーの声か?)

「旦那様の……とっても、たくましくそそり  
立つてるわぁ」

(こっちは琴音……んっ? なんだか、下の  
ほうが妙にむず痒いな……)

「ちょ、動かないでよっ! うまく舐められ  
ないじゃない」

(スマンな、あすか……)

ちゅる、ちゅる、ちゅむ……。

いまだ判然としない意識の中で、荘介は  
下半身にもたらされる快楽を享受する。

(なんか、すっげえ気持ちいいんだけど……  
いったい、何がどうなってるんだ?)

荘介の意識が、次第に鮮明になってくる。  
やがて、彼はゆっくりとまぶたを上げた。

「……あっ、旦那様が起きたみたいや☆」

「ん……おはよう、琴音」

何事もなかったかのように、琴音に挨拶  
をする荘介。もっとも、彼の下半身が露出  
し、隆起したペニスを琴音が舐めている時  
点で、何事もないはずがないのだが。

「さ、さっきはゴメンね。いきなり、荘介があ  
んなことになって、ワケがわからなくなっ  
ちゃって……」

「その分、あすかもがんばって荘介に奉仕し  
てるんだからね!」

付け加えて言うならば、荘介のペニスを舐  
めているのは、あすかとエミリーも同様だ。

つまり、彼の股間では今、3人の少女たち  
がフェラチオをしているという、トンでもな  
い光景が広がっているのだ。

「ははっ、そんなの気にするなって………  
って、何やってんデスカ、おまえらはっ!?!」

完全に状況を把握した荘介が突っ込みを  
入れる。どうやら、彼は気絶してる間に、彼  
女たちにイタズラされていたらしい。

「つか、悪漢たちは?」

「ん? 全部、やっつけちゃったよ」

あすかが指したほうを見れば、そこには折  
り重なって山となった悪漢たちの姿があった。

一応、生きてはいるようだが、ずいぶん  
とこっぴどく痛めつけられたのは、傍目にも  
明らかである。

「すげえ……ん? 連中をやっつけたのに、  
どうしてイベントが終わらないんだ?」

「んとね、この世界のイベントは「悪漢たちを倒して、囚われのヒロインからお礼をもらう」のが、終了条件なんだ」

「……もしかなくても、ヒロインって、俺のことか？」

莊介の問いに、にへらっと笑うエミリー。どうやら、その通りであるらしい。

「そっか……そうだな。今回は完全に助けられた形になるしな……で、どうして俺がおまえらにフェラされてんだ？」

「だって、うちら、旦那様にお礼をもらわなアカんし……はむっ」

「おふあっ!？」

悪戯っぽい笑みを浮かべた琴音が、バクリと莊介のペニスにかぶりついた。

「あっ、琴音。ズルイよぉ……じゃ、わたしはこっちにいつちゃおっと」

「ちょ、待て……そこはっ!？」

エミリーが莊介の玉袋を持ち上げ、その裏筋にツツと舌を這わせた。

「うおっ!？」

未知の快感に、莊介の身体がビクビクと震えた。その姿がおもしろかったようで、エミリーは丹念に玉袋を愛撫し始める。

「へえ、ペニスはパンパンに膨れてるのに、こっちはしわしわのままなんだぁ……ちょっぴり、不思議かも」

「それは、男の子の身体の神秘ってことにしとけ。……で、どうしてエッチがお礼になるんだ？ 説明をブリーズ」

「お礼っていうのは、私たちがして欲しいこと……したいことっていいんだよね」

莊介のペニスから顔を離したあすかが、もじもじと身をよじらせながら口を開いた。「ああ。そうじゃないと、お礼にはならないだろうしな」

「じゃ、そういうこと。私たちは、莊介とエッチがしたいの……ダメかな？」

上目遣いで、あすかは莊介の顔を窺う。莊介の胸に、熱い想いが込み上げてきた。「んなわけねえだろ？ そういうことだったら、3人も俺が思いっきり愛しまくってやるぜっ!」

そう言って、腕を振り上げようとした莊介は、いまだ自分が縄が縛られたままであることに気づいた。

「つか、俺……なんで縛られたまま!？」

「気づくの遅いってば」

苦笑したあすかが、今更なことでも驚く莊介に突っ込みを入れた。「うふふ」新しい何かに目覚めそう？」

「いや、そっちの話は別の世界で、散々やりまくってるから……で、どういうわけだ？」

「そんなの簡単だよ。ダーリンが中心になってエッチしたら、わたしたちがお礼してるみたいになっちゃうじゃない」

「……む。確かに、それは……そうだな」

エミリーの言葉は的を得たものであった。

莊介が3人を悦ばせ、自らも快楽を得るためにエッチをすれば、それは普段と同じ、彼が主導権を握ったエッチとなるだろう。

「だから、今日はいつもと逆。莊介は私たちのこと……いっぱい、気持ちよくさせて」

保安官の衣装を脱ぎ、全裸となったあすかが、莊介の前に自らの秘裂を晒した。

「ま、たまにはそういうのもいいか。分かったよ。精一杯、奉仕させてもらおうぜ——」

莊介の舌が、既に愛液で濡っていた彼女の陰部を這いずる。

「う、あう……やっ……はぁ……」

切なげな声であすかが鳴く。

「どうだ……気持ちいいか？」

やおら莊介は、舌の先端を割れ目の中に潜り込ませた。

「ひうっ! いい……気持ちいいよぉ」

あすかの身体がビクンと震える。彼女は、陶然とした眼差しで、己の身に駆け回る快楽を訴えた。

「ね、ダーリンは気持ちいい？」

「……ああ、今にもイキそうだ……!」

莊介は袋の愛撫を続けるエミリーにそう答えた。実際、彼の腰の辺りには熱い塊が込み上げてきていた。

「じゃ、仕上げといきますか」

「せやね☆」

びちゅ、むちゅ、ちゅ……。

エミリーと琴音が、互いの頬を擦り合わせるようにして、莊介のペニスを舐めあげる。絶え間なくもたらされる快楽に、ついに彼の欲望は限界を迎えた。

「うっ!」

びゅる、びゅる、ぶびゅるる!

「わっ!」

「ひゃん!」

吐き出された白い欲望の塊は、エミリーと琴音の顔をどろどろに汚していた。そのあまりの勢いに、ふたりは驚きの声を上げる。

「すっごく濃い……ダーリンの臭いがする」

「はぁ、うちの口の中にもいっぱい……」

エミリーと琴音はそれぞれ、精液を浴びた余韻に浸っている。その淫靡な姿は、再び彼のペニスを隆起させるのに、十分過ぎる破壊力を伴っていた。

「莊介……私、もう……がまんできない」

淫欲に瞳を潤ませたあすかが、勃起したペニスの先を秘裂に押し当て、それを膣内にくっつき飲み込ませた。

「あああああっ!」

「あ、あすか、ズルイよぉ」

「順番やで、順番」

あすかの行為に気づいたエミリーと琴音が、それぞれ不満の声をもらす。(つか、3連戦は確定なのね……)

まあ、予想はできていたことだ。莊介は胸中で苦笑する。

「あっ……ふぁ……あっ……!」

汗ばんだ髪を揺らし、あすかは莊介の腰の上で淫らに踊る。

「にひひ」 私たちも混ぜてもらおっと。琴音は右のほうをお願いね」

「了解や」

不穏な笑みを浮かべたエミリーが、琴音と共に莊介の上着をはだけさせる。そして、ほどよく筋肉のついた彼の胸板が露になった。

「んっ」

「失礼しますわ、旦那様」

「おあっ!」

それは、莊介には想外の攻撃だった。エミリーと琴音が、彼の乳首を舐め始めたのだ。「ダーリン、気持ちいい？」

「い、いや……くすぐったいようで、気持ちよくもあり……とにかく、変な感じだっ!」

「それは結構や☆」

エミリーと琴音は、快感に悶える莊介の顔を眺め、顔を見合わせて笑った。

「あ……莊介、私……そろそろ……!」

「おう、気持ちよくイッてくれ!」

莊介は自らも腰を突き上げ、あすかにさらなる快楽を与える。

「あっ……はっ……やっ……ダメ、イッちゃう……イッちゃうううう!!」

ドクン! ドクッ! ドクッ!

ペニスが脈打ち、あすかの膣内に熱いザーメンを注ぎ込む。それさえもが彼女に快感を与え、あすかはビクビクと身体を震わせた。

「あすか、とっても気持ちよさそう……」

「……じゃ、次はうちらを気持ちよくさせてな、旦那様」

達したばかりの莊介に、エミリーと琴音はニコリと微笑むのであった。

「あいつら、このゲームをクリアする気あるのかね？」

酒場の片隅で、アサノモドキがグラスに注がれたミルクをあおっている。彼は莊介たちの情事を横目にして、肩を竦ませる。

「ま、楽しそうにしてるから……いっか」

グラスがテーブルに置かれると同時に、彼の姿はいずこかに消えていた。

【おしまい】

# MAKER'S COMMENT

## メーカーコメント

開発者のお三方に、作品について語っていただきました

### STAFF

**ハニートースト**  
Honey Toast  
企画/ディレクター

**ビター・ココア**  
Bitter cocoa  
企画

**マンゴーエクレア**  
Mango eclair  
マネージャー

#### 「幼なじみ」メイン作品が意外に少ない不思議

——最初に、「幼なじみと甘〜くエッチに過ごす方法」を企画するに至った経緯を教えてください。

ビター・ココア（以下：ビター）「キャラクターとして以前から「幼なじみ」は定評がありました。定番なキャラクター設定で多くの作品にも使われているのですが、特にこれをメインの設定として大きく扱った作品が意外に少ないと感じていましたよ」

マンゴーエクレア（以下：マンゴー）「考えてみると、ここまで定番なキャラクタージャンルにもかかわらず、「妹」、「姉」、「母」、「人妻」、「巫女」、「メイド」がタイトルジャンルでメイン張っているソフトはたくさんあるのに、なぜ「幼なじみ」がないのか？ ちょっと不思議に思っちゃいますね」

ハニートースト（以下：ハニー）「しかも出てくる登場キャラクターたちがすべて幼なじみである作品は希少です。まあ、こういったゲームもあっていいと思っただけですよ」

——「お姉さん、路線のタイトルから、前作「School ぶろじょくと」、そして本作へと続く路線転換で、なにか意識した点や気を使った点はありましたか？

ビター「今回のコンセプトは、ちょうど「お姉さん、路線のラブラブでエロエロなタイトルと、「School ぶろじょくと」のキャラクターを前に出したドタバタでエッチなコメディーものの中的位置づけです。「School ぶろじょくと」で獲得した新しいユーザー層と、以前のアトリエかぐや好きな、エッチを一番の目的としたユーザー層のふたつの獲得を視野に入れたタイトルです」

マンゴー「なんだかすごいことのように言い切っちゃってるけど、言い方変えたらどちらでもない中途半端なコンセプトに聞こえてとっても怖くなるね……」

ハニー「たしかにコンセプトの要素だけ聞くと危険な香りがします(笑)。「幼なじみと甘〜くエ

ッチに過ごす方法」については、「お姉さん、モノといいますがエッチ主体のアトリエかぐやであるゲームの方向性から路線転換をあまり意識してません。むしろゲーム構成の骨組みは従来のエッチ主体になってます。ただ、今回取り扱ったタイトルからもお分りの通り、前回の「School ぶろじょくと」で初めてアトリエかぐやを知っていただいたユーザー層からも認識できるようなジャンルを選んでます」

ビター「新規のユーザーにとって次回作がいきなりエロエロ下品なタイトルでは思っきり警戒されますからね……。もっと上品にエロを表現するため、イメージを緩和させたといったところでしょか」

マンゴー「ほ、本当にアレで上品かと言われれば、あの長く恥ずかしいタイトルに聴いて店頭でパッケージをレジに持って行けない人も巷ではちらほら存在すると耳にしているのですが……」

ハニー「従来のエッチ目的で購入を考えている層にとっては、エッチゲームであるところをアピールしないと見ていただけないですからね。その分、新規のユーザーから見れば刺激あるタイトルになってこのネームに決めた効果もあるのかなと思います。実際、今回で初めてアトリエかぐやのゲームがすごく「エロい!。」と感じたユーザーも多いのではないでしょか」

#### 妄想に役立つ「幼なじみランク」

——システムについて特に気を配った点はありますか？

ハニー「今回のゲームシステムとして、「幼なじみランク」なるものがございます。平たく言えばゲーム進行していくごとに幼なじみと主人公の関係性が親密になっていくといったものです」

マンゴー「これって単なる進行状態を表現しただけのものなだけでアレですよ。わざわざ表現しなくてもいいんだけど嘘でもあってほしいというか、こういったものはないよりあった

方が想像（妄想）できるよね〜

〇〇〇。(´д`)y—」

ビター「そもそもは複数の幼なじみがいるので、それぞれにランクがあっておもしろいかなと思いついて、目指すは「真の幼なじみ」なので、おバカな目標にはこれくらいふざけた格付けがつりあいも取れます。なにより幼なじみをテーマとしているので、ゲーム的にわかりやすいアピールが必要ですからね」

マンゴー「なんとと言っても食いつきには妄想力が重要ですから、盛り上がりでバカな部分あったほうが幼なじみやすいと思うんですよ」

——主題歌についてのみなさんの感想は？

マンゴー「いや〜、歌詞っていきなり活字だけで読むと違和感出ちゃうもんです。曲調やリズムを考えず、始めの「愛・愛・愛・甘えちゃう。のテンションが出て、イメージが成立するまで時間がかかりました」

ハニー「実際に合わさった曲は思った以上にマッチしますから不思議ですね」

ビター「今回はこれまで一番話題的な評価がありました。いつも注目の集まる体験版に、主題歌入りムービーが入ってましたから、一緒に評価されることが多かったと思います。皆さんなかなか気に入っていただいたようなので作った甲斐がありました」

#### 王道キャラながら想像以上に評価の高いあすか

——涼風あすかのキャラクターコンセプトを教えてください。

ハニー「世話焼き女房。とにかく定番なイメージを丁寧に作ろうと考えました。予想以上に一番評価が高かったキャラです。これは今回初参加のライター七央結日のテキストが功を奏してますね。プロローグの仕上がりはとていいですよ」

ビター「確かに今回のプロローグではキャラクター描写を多く見せようとボリュームを増やし、あすかとの幼なじみ関係を描いているのです



※原画担当のchoco chip先生は次回作の制作でご多忙のため、コメントはお休みさせていただきます。あらかじめご了承ください。(編集部)

が、予定していたものよりもさらに多く書いていただき、今まで制作してきた中で最大の量と質がある内容となりました。特に主人公の音からの幼なじみであるあすかは王道そのもののテキストを癖なく巧く伝えることができていると思います。

ビター「実際、体験版が公開されたあととそれまで評価が微妙だったあすかの人気うなぎ登りに上がりましたから、内容的なキャラクター描写が評価されたんですね」

## アブノーマルシチュを越えた その先に愛がある琴音

—御堂琴音のキャラクターコンセプトは、どのように生まれたのでしょうか？

ハニー「地方の幼なじみとしてはインパクトあるところで、やはり方言を使うほうがわかりやすく違いが出る。そして、方言ときたら関西弁。大阪メーカーということもあり、方言を理解できる面と、以前にも一度試みますから琴音は作りやすかったです」

マンゴー「琴音についてはわかりやすくエッチなほうにキャラクター付けをしすぎた傾向があって、少々純情なライトユーザーにとっては刺激が強すぎたと、発売されたあとの評価を見ると感じますね……」

ハニー「それほど濃いシチュエーションを設定したつもりはないのですが、アブノーマル系として認識されてるところあるようです。お約束のSM系プレイではないが、やっぱり女の子を縛っちゃったり、主人公以外の人物（特に男性キャラクター）にヒロインの裸を見られるなどは刺激が強すぎて耐えられないでしょう」

マンゴー「その常識を打ち破ってもっと先の世界へ心を開放するとwsでrftgyj3h-lp;@」  
ビター「いやー、裏を返せばこれほど琴音に対して愛情持ってくれた方々が多くて大変うれし

## 「おっぱいマウスパッド」が大反響 エロかわいさで安定人気のエミリー

—エミリー・ウィンスレットのキャラクターコンセプトはいかがでしょうか？

マンゴー「快活なツインテールでわかりやすく金髪娘、それだったら単純に外国人がいいなと決めちゃいました。いわゆるイメージ先行型ですね。絵的に一番良い仕上がりで、ビジュアル的に推していくタイプです。とにかく「エロかわい。キャラクターにして妄想力を膨らませようと考えました。あっ、それとアメリカ人のくせにぜんぜん喋り方が外人らしくない」といったツッコミは、なしでお願いします（笑）」  
ハニー「発売前から発売後まで人気は変わらず高いキャラクターで、一番安定してる感じます。またエミリーについてはメディア! ゲームショップ様からの商品企画で、世界初、乳首に凸部分ありの立体おっぱいマウスパッドが製作されました」

マンゴー「もう完全にネタと勢いだけの商品ですが、作りがしっかりしていて意外に満足できるものに仕上がりに、メディア! 商品担当様のこだわりには驚かされましたよ。ネーミングも「エミリーちゃんの萌え萌えハアハアおっぱいマウスパッド」とインパクトあります。これについては予想以上の人気で、通販予約締め切りも早々と終了し、商品を発売してからも、数日経たないうちに即、すべてが完売しましたから驚きです。その人気と要望の多さから、あすかで立体おっぱいマウスパッド第2弾の製作が決まりましたからね……。すごいことです……」

## 1ヒロインあたりのエッチの ボリュームが大きい作品に

—ヒロインを3人に絞った理由は？  
ハニー「単純に、エッチCGを1キャラクターに対して多く配分できるように人数を絞った結果です。今回の狙いは、ライトユーザーへの「エロい、ゲームの提供なので、必然的にひとりのキャラクターに対してのエッチCGボリュームも多

くなるスタイルとなりました。またキャラクターが少ない分、ひとりのキャラクターを覚えやすく認識していただき、ゲームに魅力を感じてほしいのでわかりやすく人数を絞ってます」  
ビター「人数による豪華さも、見ためのパッケージとして悪くないのですが、見せたいエッチイベントのボリューム感が今回は優先順位高かったんで、やはり、ひとりのキャラクターに対してシーンを増やすほうを選んでます」  
マンゴー「登場キャラクターが多くて、1人のキャラにつきシーン数が少ないと、全体的なイメージでエッチが少なかったと、なりかねないですから……。今回は特にエッチ評価を落とすはなかったんで、十分にボリュームを持った内容で製作しました」

—小さいころの遊びと、それに関わるエッチについて気になった点は？

ビター「あくまで幼なじみ同士の間で行われる行為なので、過度なスキンシップでも許されるといった考えが基本です。昔の遊びを行っているのであって、快楽的な認識なく我慢に耐えるゝ羞恥、が一番のツボですね。ヒロインと結ばれるまで、この形を崩さずに維持することには、結構気を遣いました」

マンゴー「エッチな遊びを実践して女の子が快楽に溺れてしまうと、わざわざごっこ遊びをやる意味がないですからね。もっと効率的に快楽を生む方法を行ったほうが手取り早いので（笑）」

## ライトユーザーに「エロ」を 浸透させるのがテーマ

—本作に登場する御堂琴音と、「ナースにおまかせ」の御堂鈴は従妹とのことですが、今後過去作品とのリンクを取り入れる予定などはありますか？

ハニー「もちろん過去作品の魅力ある世界観との関係は活かしていきたいところはございます。ただ以前に定評あったキャラクターな分、使うとなれば期待値は高くハードルが上がってしまう。さらに声優さんなどの問題もありですね」  
マンゴー「前回使えなかった声優が使えなかったりするのよね……。事情はいろいろ、スケジュールが取れなかったり、現在は18禁の作品には出演してなかったりと」

ハニー「他人のものなのですが、ハードルが上がっている分、下手に冒険できないし、安定した人はすでにウチの作品で何回も使ってますから、声優選びも大変です。今回登場させた琴音などは「関西弁。しゃべれる人、しかもただししゃべれるだけではなく、ちゃんと近畿圏出身の関西人が基礎である方、そして人気声優となると選択肢はもう限られてますから、オファ一断られたらこの企画自体なかったかもしれませぬ……」

—本作に関するユーザーからの反響はいかがでしたか？

ハニー「体験版公開時あたりから急激な盛り上がりを見せましたね。それまでキャラクター的に評価に上がらなかったあすかに、注目が集中しました」

ビター「体験版が思った以上に好評だったので、ゲーム本編内容の評価がどう出るか怖かったところありましたが、発売日以降もなかなか受けは良い方向だと思います」

ハニー「前回から今回と、主にライトユーザーをターゲットとしてますが、今回は特にアトリエかくやのセールスポイントである「エロ」を浸透させる狙いがあった作品です。なので、作品として中身は完全にエロ押しタイプで徹底しました。評価のほうも「エロい」といった声が多く満足いただいた結果で安心いたしました」

## 幼なじみ特有の 三段活用がコンセプト

—各ヒロインのエッチシーンで気をつけたことはありますか？

ビター「幼なじみとしての関係性（距離感）についてが一番ポイントだと思います。性的行為について、序盤では幼なじみとしての昔の遊びで性行為が目的ではなく、あくまで遊びの延長、

そして幼なじみと初のエッチ。これは本番行為を指しますが、幼なじみとの関係性が決定的に変化するところですね。これのあとと後ではふたりの距離が一気に縮まり、接し方も変わりますね。特に気をつけたキャラクターはあすかです。登場ヒロインの中で昔から一緒に過ごしている唯一の幼なじみですから、ここをがんばらないとタイトルに唾ついでちゃうことになりますから」  
ハニー「エッチシーン内容に関して言えば、琴音でしょうか。このキャラクターはエッチについてのネタはゲーム本編の設定で、SM本が影響を受けている内容なので、マニアックなプレイ感が入ります。キャラクターコンセプトについての質問にも被りますが、やはりライトユーザーに若干引かれています……。ですが、あえてここはマニア好きに向けて作っている部分ですので、プレイ好きな人間はこのゲームで一番エッチである内容だと思います。大きく好み

が分かれるところですね」

—本作でやり残したこと、もしくはボツになったアイデアなどはありますか？

ビター「今回コンセプトのキーワードである「幼なじみ」と「音、仲良くやっちゃってエッチな遊び、などは早く出ていたのですが、それら結びつけるネタを考えることに苦労しましたね」  
ハニー「ただ考えてはみたものの、「幼なじみ、ならではイメージを延長したもので、エッチな事柄を結びつけるゲームコンセプトを考えるところは苦労しました。当然ではありませんが、簡単に「幼なじみ、のみの属性ネタでは企画は立ちません。「なんで幼なじみなのかの必然性、や「その幼なじみたちはどんな風に魅力があるの? どんなエッチあるの?、などなど、それらが感じ取れて想像できるような表現に仕上げないと、なにを作っているのかわからないゲームになりますからね。「幼なじみ、といったら「昔の思い出。=「エッチな遊び。これがこのゲームのすべてです」

ビター「コンセプトはさておき、入れたかったところといえば、幼なじみたちの過去のお話など、「思い出、を語ったイベントも、今よりもっと入っていてもいいと思いましたが。発売後の評価でも、過去や現在の日常エピソードを入れて、ヒロインたちとの関係性や絆を描くような評価が高いとホントに「抜きゲー、を作ったのか? と逆に自信もなくなるのですが……（笑）」

## エロエロ全開がかくやの本分 ようこそ「抜きゲー、ワールドへ

—今後はどのような作品を作りたいと考えていますか？

ハニー「今回は、エッチメインの作品に的を絞って、製作する方向に取り組みが進んでいます。そろそろエッチ三昧ゲームが恋しくなっているユーザー様も多くなっているでしょうから、頃合かと考えますね。また本作の「幼なじみと甘〜くエッチに過ごす方法」を楽しんでいただいたライトユーザーの中には、エッチがメインのゲームでも楽しめると思った人、多いのではないですか?」  
マンゴー「ようこそ、「抜きゲー、ワールドへ!!」  
ビター「アトリエかくやとしては今後もエッチ度の高い作品を目指してゲーム作りに取り組みます。次は、久しぶりのエロエロ全開作品なのでワクワクしますね」

—最後に、ユーザーのみなさんへのコメントをお願いします。

ハニー「いつもアトリエかくやのゲームをプレイしていただき、ありがとうございます。今年はいよいよアトリエかくやの第4チーム、honky-tonk pumpkinがデビューし、なんと早くも年内にもう一本発売する予定です。チームBerkshire Yorkshireも、9月に新作発売予定です。皆様のご期待に添えるようがんばっておりますので、今後とも応援よろしくをお願いします!」

—本日は、お忙しい中、どうもありがとうございました。

EXTRA MEMORIES



ツインテールブックス

# 幼なじみと甘〜くエッチに過ごす方法 オフィシャルファンブック

2007年9月1日 初版発行

発行人 中島充晶  
 発行所 株式会社彩文館出版  
 〒162-0805  
 東京都新宿区矢来町114 高橋ビル3F  
 TEL 03-3267-8533  
 FAX 03-3267-8534  
 印刷・製本所 凸版印刷株式会社

企画・編集 GoodsTrain 

ホームページ <http://www.goodstrain.jp/>

Eメール [info@goodstrain.jp](mailto:info@goodstrain.jp)

本書の一部あるいは全部を無断で複製・上演・放送等を行うことは、法律で認められた場合を除き、著者および出版者の権利侵害となります。あらかじめ小社あてに許諾を求めてください。

造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、営業部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。

なお、この本の内容についてのお問い合わせは、GoodsTrainまでEメールにてお願いいたします。

定価はカバーに表示してあります。

©2007 KaGuYa

Printed in Japan 2007

ISBN978-4-7756-0232-4 C0076

編集協力・執筆 ナギー、藤山恵司、増田高志、みつる りわ  
 鷲尾トモノリ（株式会社エム・ツー）

装丁・本文デザイン 須磨和貴  
 カバー&ピンナップイラスト choco chip

協力 有限会社PINA



幼なじみ☆  
甘〜エッチに  
過〜方法  
キティちゃんファンガ



produced by



9784775602324

ISBN978-4-7756-0232-4

C0076 ¥2200E



1920076022005

発行  彩文館出版

定価 本体2,200円 +税



produced by



produced by



9784775602324

ISBN978-4-7756-0232-4

C0076 ¥2200E



1920076022005

発行 彩文館出版

定価 本体2,200円+税



## 昔やったエッチな遊びしようよ♥



- 原画家choco chip先生の描き下ろしイラストを特製ピンナップとして収録
- 幼なじみ3人の魅力を詰め込んだキャラクター紹介&イベントシーン
- ゲームをさらに深く楽しむための声優、メーカーコメント
- 販促用イラストやテレカイラストはもとより、貴重な線画ラフも満載
- ヒロイン3人+αの新作書き下ろしショートノベル4本掲載